

號 月 貳

■實生活と眞宗教

「太子の遺訓、世間虛假惟佛是眞」

■初めて如來の眞實に接して、六十年來聞法の非をさとする

■『歎異鈔』講義

第十三章 「善惡二業のこと」

■今迄は自分といふものを棚に上げて居た

■『教行信證』信卷講義

願成就釋 「現生十種益」

求 道

第 拾 貳 卷

第 貳 號

求道第拾貳卷第貳號目次

求道

◎實生活と眞宗教

「世間虚假、惟佛是真」

講話

◎「教行信證」信卷

近角常觀

第七席 願成就釋(承前)

一六 三百八十餘人の人の聞き方

一七 聞きちがひの源

一八 眞實の信心には必ず名號を具とす

第八席 願成就釋

一 清淨報土の眞因 二 現生十種の益 三 平太郎熊野參詣の意義

四 某縣師範學校の方の一例 五 至徳具足の益等 六 心光常護の益等 七 知恩報徳の益等

講話

◎歎異鈔

近角常觀

第十三章(承前)

告白

◎初めて如來の眞心に接して、六十年來の聞法の非をさとる。 前田清次郎

◎今迄は自分といふものを棚に上げて居た 前田はる

時報

◎求道講話概況

毎日曜午前九時

求道學舎

(本郷區森川町一帯地)

毎土曜午後二時

第一 求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月二日午後七時

第二 求道會

(日本橋區葎町説教所)

講話

はならぬ。

◎全體實人生と眞信仰といふことにつきて大に着眼せねばならぬ二個の點がある、一は今日の時代精神若くは近代思想なるものと佛教とは、根本的に其立脚地を異にすることである。

◎何時の時代にしても我等人間の立場としては、我等の生活を眞實なるものとして肯定せんとするは凡夫の常である、殊に近代思想に於ては、大に人生を肯定して生さんとし、努力せんとし、眞實なるものとし、實在なるものとせんと試みつゝあるのである、しかるに佛法の根本義は人生は無常である、生老病死は苦である、世間は虚假である、諸行は無常である、諸法は無我である、我等は煩惱具足である、世界は火宅無常である、結局消極である、是根本に於て東西方角を異にする如く、黒白色を異にするが如く、全然立場を別にするを注意せねばならぬ。

◎かくの如く全然消極とすれば、如何にして此虚假不實の人生が救済せられ得るか、是が第二の着眼點である、曰く人生世間の虚假なること、佛陀救済の眞實なることとの關係である。

◎世間虚假、惟佛是真といひ、又煩惱具足の凡夫、火宅無常

求道

第拾貳卷 第貳號

實生活と眞宗教

世間虚假、惟佛是真

聖徳太子遺訓

◎實生活といふ標題を掲ぐるときは、人は直に之を攫まんと欲するのである、即生さんと欲し、努力せんと試みるのである。しかるに實生活は却て生さんとして生くる能はず、努力せんとして努力する能はず、却て人生は皆虚假なるものなることを知りて、其虚假を見捨てたまはぬ御恵が唯一佛陀の眞實なることを信じたるときに、實生活が生じ來るのである。

◎聖徳太子の御遺訓が世間虚假、惟佛是真といふことを仰せられたといふことは、天壽國曼陀羅の銘に書いてあるのである、如何にも穢土をすて、眞實眞如の佛の御國に御歸りなされるべきの遺訓として、實に我等骨髓に徹する仰である、併しが一代四十九歳の間、政治文學、美術、慈善、すべて世間的經營の實生活を買きて御働さ下された御精神なることを忘れて

の世界は、みなもてとらごたはことまことあることなきに、たし念佛のみぞまことにておはしますといへば、直に世間と佛法とを黑白清濁を並へたるか如くに感じ安いのである、世間を捨て、佛法に入る様に考へらるゝのである、かく云へは何んとやらん遁世、隱遁、出家發心、捨家棄欲であらねばならぬやうに考ふるのである。

○いかにも世間は黒に違ひない、然れども佛法の白は是と相對的に相並びたる白ではない、其世間の黒をして遂に白ならしむるまでの白である、煩惱は濁に違ひない、然れども其濁に對立しつゝある清の佛法ではない、如何なる濁れる煩惱の水も隔てなく、飽まで清めて仕舞ふ清らかなる彌陀の清水である、本願力に遇ひぬれば、むなくすぐるひとぞなき、功德の寶海みち／＼と、煩惱の濁水へだてなしてある。

○不斷煩惱得涅槃といひ出家發心のかたちを本とせず、捨家棄欲のすがたを標せずといふのが、黒を飽まで白からしめ、濁を飽まで清からしむる本願他力眞宗の眞面目である。

○白からしむるとか、清からしむるといへば、煩惱を斷じたり、心を清くするとの様にさこそるが左様ではない、寧ろ煩惱を斷じ得ざる悪しきころを飽まで見捨てたまはぬ大悲心で

といふは、我身は光明ありといふ換言と見てもよい、されば一步許して、夫程親切なる我身でも、他人の冷酷に接するときは自己も冷酷になるではないか、夫程光明なる自己でも世人の暗黒に接するときは亦暗黒になるではないか、否今日まで親切である光明があると思ふて居たは、畢竟他人世人の親切光明を豫期したる條件附の親切光明にして、此の如きものは寧ろ相對的、報償的なる、頗る不眞實、不清淨なる名聞利養に過ぎないことになる、して見れば、結局最後の問題としては自己が虚假である、不眞實である、不清淨であるといふ問題になるのである。

○善導大師が深心釋の機の深心を釋して、我身は現に是れ、罪惡生死の凡夫と言はれたは、實に千古不磨の大德音である、人生問題、信仰問題に手を染むるものは、我身は現に是れ罪惡生死の凡夫といふことを忘れてはならぬ、併黒ばかりでは黒はしれぬ、濁ばかりでは濁はしれぬ、如來眞實清淨の清白があらはれねば分からぬ、法に出遇ふて機法二種の深心が一度に起るのである。

○さればとて如來清白の法と、我等の黒濁の機とを對比して自覺するのでない、我等が黒濁を飽まで哀愍攝受したまふ清

ある、不眞實不清淨なる我等を哀愍攝受したまふ如來の眞實清淨の御心である、之を白といひ、清といふたのである。

○近頃多く青年求道者にお話するとき、求道者の豫想とお話をする我等との心の齟齬の點を明瞭にすることを得た、誰も人生に於て無常とか、不實とか、不淨とかを感じたるとき、之を自己其物に歸することを忘れて、之と引換に常住、眞實、清淨を求むる人が多い、そこで此の如き佛陀の存在を疑ふといふ結論に達することになる。

○宗教は飽まで自己の救濟である、個人の自覺である、我身の悟である、我生の救である、故に人生の無常と言ふか、不實と言ふか、不淨と言ふか、之を自己の上に感せねば何もならぬ、如何に他人が老病死があらうか、釋尊が之を自己の上に觀ぜられなれば國を捨て城を出でられることはなからう、其如く、人生が冷かであるとか、世間が暗黒であるとかいふときに、徒に他人の冷酷のことや、世人の暗黒面のみを見て、我身の冷酷なること、暗黒なることに氣附かぬものが多い。

○若し極端に言はしめば、他人を冷酷なりと評するは、其裏には我身は親切なりと誇りつゝあるのである、世人は暗黒なり白の御慈悲である、我等が人生世間の冷酷なるに冷却せしめられて亦冷酷となれるを悲憐したまひて、其冷酷を温めずんば止めぬといふ大慈大悲が、如來の超世希有の大願である。

○親切なれば迎へられ、冷酷なれば却けらるゝが世の常なるに、かく冷却し了せるを憐みて、冷酷なる程見捨てられぬといふが救濟の本意である、超世希有の正法と名つけらるゝ所以である。

○こゝに到れば、如來會の文を想ひ起さしむるものがある、曰く彼國の衆生、若くは當に生るべき者、皆悉く無上菩提を究竟し、涅槃の處に到らしめん、何を以ての故に、若し邪定聚及び不定聚は、彼因を建立せることを了知すること能はざるが故にと。

○如來は何を以て彼因を建立したまへる、南無阿彌陀佛の念佛は破戒無戒愚痴無智、少聞少見罪業深重にして、何れの行も及びがたき衆生のために而已建立したまへる大行なり、是彼因を建立したまへる所以なり、其罪惡の衆生とは他人ならず、我身一人にあらずや、聖人の常の御述懐に、彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親戀一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんと

おぼしめしたちける本願のかたじけなさよとあるも、畢竟我身一人の罪惡のために建立したまへる念佛なり、嗚呼何たる恩徳ぞや、何たる大悲ぞや、實に不思議なり、佛智不思議なり、和讃に曰く、不思議の佛智を信ずるを、報土の因としたまへり、信心の正因うることは、かたきかなかになほかたしと。○此の如く罪惡深重の無明の大夜をあはれみてあらはれたまひし盡十方無碍光佛にてまします、具縛の凡愚、屠沽の下類如何なるものと雖、刹那に救済したまふ名號なり、光明なり、誓願なり、佛智なり、佛智不思議なり、誓願不思議なり、名號不思議なり、不可思議光なり、西方不可思議尊なり。○全體何人も人生の消極方面は事實として之を感ぜざるものなけれども、如上の如く其暗黒を全然救済したまへる大光明、大誓願の大積極を得ることが難いのである、極難信といひ難中之難といふが是である。

○法然上人は我等は發菩提心が能はぬと言はれた、而して親鸞聖人は信心は淨土の大菩提心なりと言はれてある、法然上人は諸善念佛對比して廻向不廻向と言はれた、親鸞聖人は念佛を如來廻向の不行と言はれた、法然上人は破戒無戒のものゝための念佛と言はれた、親鸞聖人は一生之間能莊嚴臨修引

講話

「教行信證」信卷

近角常觀

第七席 願成就釋 (承前)

一六 三百八十餘人の人の聞き方

そこで親鸞聖人は、法然聖人一席の法縁に於て、其選擇本願南無阿彌陀佛の御教化を承はり、其の法然聖人の仰しやる南無阿彌陀佛は、唯着さへすればよいといふ六字の着物に非ず、此の一枚は實に自分如き亂暴者に着させやうととの、親の慈悲の塊の着物であると頂いて、

智慧光のちからより 本師源空あらはれて  
淨土眞宗をひらきつゝ、 選擇本願のべたまふ。  
一代の間南無阿彌陀佛々々と喜ばれたが親鸞聖人の信仰であります。

處が一緒にお聞きになつてた他の三百八十餘人の弟子方も、之れ丈の譯け合ひが分らぬ筈は無い。御同やうが話したり聞いたりしてさへ分るのであるから、之丈の筋合ひは皆な分つて居られたのである。それに何故間違ひが起つたか、といふに、筋合ひは皆な分つたのであるけれども、夫れが

導生極樂の信仰的家庭を實現された、法然上人は五遍まで一代經を繙かれたれども、選擇集には三經一論を選擇し、善導一師に依られた、親鸞聖人は教行信證に一代經を皆如來眞實の顯現なりとして、往生之業念佛爲本の一句より三朝淨土の宗師の眞宗興行を仰がれた、法然上人の消極は親鸞聖人の積極によりて顯はれた、法然上人の一向專修の念佛が、親鸞聖人の本願他力眞宗となつたのである。

○是が虚假不實の人生を哀愍攝受したまふ唯一の如來の清淨眞實にてまします、是恰も三心釋聖人の文點に、一切衆生の身口意業の所修の解行、必ず眞實心中に作したまひしを須むんことを明さんと欲ふ、外に賢善精進の相を現することを得ざれ、内に虚假を懐けば也の眞意である。而して聖徳太子の世間虚假惟佛是眞の遺訓と全く同意である、是親鸞聖人が煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、すべてのことみなもてそらごとたはごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとの金言と、前聖後聖符節を合せたるが如しである、是念佛成佛是眞宗の眞髓である。

本當に自分の身體に頂けてなかつたからである。三百八十餘人の人は何う思ふて居たかと言ふに、耳に御師の仰せを聞き、口に南無阿彌陀佛を稱へらるゝ有様は、如何にも親の織上げて下された着物を喜んで居らるゝやうであつたけれども、心の中には親の手織りよりも人の着てるやうな綺麗な着物が欲しいな、着たいな、の思ひがあつたのである。故に身には親の手織りを纏ひながらも、心では人の着物を羨んで居つたもので、口には一心專念念佛を稱へ詰めて居つても、心は「もつと修行して善くなり度いな、あの人はあの修行してあんなに善くなつた、自分もあのやうになり度いな」の思ひで着てたのであるから、着ながらも之では一心に専らとはならぬのである。私が信仰上修養を言ふを嫌ふのは茲である。修養仕度の言ふ人は、皆な之になつて居るからであります。故に御同やうも茲は能く氣をつけなくてはならぬ。耻かしなからも私の經驗を言ふと、私は小供の時、親から手織りの着物を貰ふて着ながらも、心中友達の着てる様な綺麗な着物が着て見度くて仕やうがなかつた。都合によると、自分でこしらへて着やうかとさへ思ふた事迄ある。仕舞ひは自分は人のやうなのを着度いにも着られぬから、仕方なしに、自分は南無阿彌陀佛々々と、親のこさへて下された手織りを着てるのである。手織りは外見は綺麗でなければ、之を着てる方が質料でよいのであると、手織りを着てるのを誇りとし、念佛を稱へるのを、飾にするやうなことになる。或は「自分は念佛を喜ぶのであるから現世祈りはせぬ、せぬと言つたら斷じてせぬ」と、我慢で親の手織りを着るやうなことになる。然らうい

ふてる心は、皆な親が着よと言はれるから着ぬならぬと、無理に着る氣になつて居るからであります。遠慮なく言ふと、東京の同行信者の方の間には、念佛を喜ぶ傍に、随分と此の現世祈りがある。折角親の手織りを着て居る者が、斯く一方人の着物を欲しがつて居るやうのことは何もならぬ。そこで斯く一方人の着物を欲しがるにも其人々々に従つて色々あつて、なか／＼一通り二通りで無い。實に千差萬別である。故に蓮如上人は『改悔文』の上にて

もろ／＼の雜行雜修自力のこゝろをふりすて、一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生、御たすけさふらへとのみまうして候。

即ち百人、千人、萬人、各其人々々に従つて、夫れ／＼の諸の雜行雜修自力の心にほだされて居るから、本當の手織りの親心が頂かれぬ。故に三百八十餘人の人々は、皆な聞くは同やうに法然聖人の本願念佛の教を聞かれたのであるが、いざとなると信の座に着かれたは、法印大和尚位聖覺、釋の信空上人法蓮、並に熊谷直實入道、及び吾が親鸞聖人の、僅に五六輩に過ぎなかつた、となつたのであります。

一七 聞きちがひの源

さて爾らば、夫れ等の人達の、さういふ聞き方になつた間違ひの源は何處に在るか。それになると夫れ等の人達は前席に言ふ「此の薬は危篤の重病人が飲むと直る處の薬である。危篤の重病人さへ直る薬であれば、況んや自分はまだ危篤と言ふ程で無いから、のめば必ず利くだらう」と、斯ういふ飲み

四十三の御時迄は、「何うしても可かぬから、何うかして光を見つて度い／＼」と、岩をもひしぐ勢ひで求められたのである。けれども、何程藻掻いて見ても矢張り此の身はもとのぼろ／＼の姿である、茲になると最早や何とも仕て見やうが無い。聖人の『和讃』には

三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、大菩提心おこせども、自力かなはて流轉せり。

御同やうも皆な之れなのであります。其處へ今佛は「汝自分の力で夫れが出来ると思ふるか、出来ると思ふは、まだ自分の價値を知らぬからそんな自惚を思ふて居るのぢや。汝は到底其の器で無いことを、我は疾くから見抜いたによつて、兼てより煩惱具足の凡夫と呼んで居るでは無いか。其の五逆十惡の汝が哀はれて捨てられぬから、我は其者が心配なく着られるやうに此の手織りを作つたといふて居るので無いか。此の手織りを作つたには、親の針一箴も何うかして汝に着せ度い纏はせ度いの、親の涙の塊りてこさへ上げた着物故、唯一枚の着物なれど何うか親の心を受けて呉れ」と、斯う思ひがけなく親の方より言ひかけられたが、佛願の生起本末である。即ち南無阿彌陀佛の六字は、之を無明無實に聞くて無い、善知識に遇ひ參らせて、此の六字は人の爲めて無い、實に私人の爲めに御成就下された親の大悲の塊であることを頂いたが、佛願の生起本末を聞いたのであります。『信卷』別序の文には

夫れ以れば信樂を獲得することは、如何選擇の願心より發起し云云。

方に皆なつて居たのである。全體私共が親の手織を身にしながらも、猶ほ他の着物が羨ましくなるといふは、親の方より「先づ汝、自分の體をよく考へて見よ、汝が他の着物が着れる身分なら、親は何もこんな心配はないのである。爾るに汝のやうな性分では他の着物では間に合はぬ。汝は到底他の着物では間に合はざる亂暴者である。何程力みても汝の力みは空力みである、汝は汗かきの仕て見やうなき悪い性分である。故に其の汝の爲め態々辛苦して仕立て、やつた此の一枚の手織りであるに、外の着物が着たいといふは、汝は自分の體の事を忘れて居るからぢや。汝が他の着物が着れる位なら、親は何しに長の修行してこの苦勞を仕やうや」とある親の眞のお心が頂けて無いからであります。之は抑も『選擇集』本願の文に、此の念佛は、愚癡無智、破戒無戒の仕て見やうなき者の爲めとある。其の破戒無戒愚癡無智は、「他の淺ましい人の事と思ふてはならぬ、先づ汝の身の上のことを考へて見るがよい。選擇本願の功能書には、亂暴者の汗かきに着せる爲めと言ふてあるなれども、其の亂暴者の汗かきとは、即ち汝自身のことを言ふて居るのである。若し汝が欲する如く、他の着物が着れる程ならば、親は何しに此の手織りをこしらへ上げやうや、人の着物を羨むよりも、先づ第一自分自身の身の様を氣をつけて見るがよい」との、やるせなき親の仰せなのである。即ち機の深心が他力であるといふ味は之から出て來るのであります。即ち私など此のお心が分る迄は、煩悶に煩悶を重ねたけれども、結局何とか仕て善くなり度い／＼の思ひしか無つたのである。又親鸞聖人でも法然聖人でも、廿九、

そこで一度此の廣大の親心を聞かして貰うて見ると、今日迄「何うかしてもつと善く仕度い、外の着物も着れやう」と思ふて居つたのが、實に傲慢不遜の申譯けなき間違ひであつたと分り、そこになると、「彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば……助けんとおぼしたちける本願の忝けなさよ」とある。夫れを皆な自分もいつ角他の着物が着れる者のやうに思ふて居るから、南無阿彌陀佛はどんな悪人でも着られる手織り故結構であるが、併し何も今迄ある着物を捨てるにも及ぶまい、といふやうな聞き方になり、諸行往生の誤りにおちる。親鸞聖人のお示しには「有るものならば着てもよい」「出来る事なら仕ても善い」といふやうの分子は一分一厘も無い。設ひ出来たとて我々の善は皆な虚事、偽はりである。皆な地獄行きの種類である。出来ることとしては一も有る事無い。『歎異抄』のお言葉には

そのゆへは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはじこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

何程善いこと仕度いかて、我々は仕度くもすることが出来ぬ。『選擇集』に破戒無戒とあるは、吾がことである。愚癡無智とあるは自分のことである。既に自から愚癡と名のらせ給ひて、斯くの如き極惡深重の自分の爲に、「極善最上の法をとく。斯く仕て見やうなき自分の爲めに、思ひがけなき廣大の御哀れみが本願の親心と、以上く／＼しなくつたが、之が最も有難き處である。即ち聞其名號の聞の字の味は、此の私一人

が爲めに長の佛の御苦勞であることを聞くが、聞の味ひとなるのであります。

### 一八 眞實の信心には必ず名號を具す

猶ほ一言するに、すると最早や聞くばかりとなる。爾らば此の本願の御心を聞かされて、成る程然うであつたかと分つた丈けて、すぐ信心かと言ふに、唯然う分つた丈けて夫れ切りに放つて置くのでは何もならぬ。私は西洋より歸つた時に、親から手織りの着物を貰ひ、一二度着た丈けて放つて置いて、大に親に失望させた事があつた。即ち「信仰は實驗ぢや、一念ぢや、もう分つた」と片つけて仕舞つて、折角の親の手織を平生着ぬのでは、何にもならぬ。若し眞に曾無一番の自分か爲めに、親が斯く迄思召して作つて下された御心が有難いならば、設ひ自分は病氣で着る丈けのゆとりが無くて、「あゝ有難い」と喜んで枕許に疊んで置くのでも着たのである。そこは『歎異抄』の告示にも

彌陀の誓願不思議に助けられ参らせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつ心のおこるとき、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。

即ち思ひ立つ心の起つた丈けて、まだ實際聲に念佛が顯はれずとも頂いたには違はぬが、併し斯く頂いた者が次の瞬間から、命あらば何うして着ずに居られやうかと言ふのである。其處は聖人の御自督の如く、「唯念佛して彌陀に助けられ参らすべし」と、よき人の仰せをかうふりて信ずる外に別の仔細なきなり」と頂いた者であるならば、何うしても其の頂いたお

述べたのであります。

猶ほ次には

『信心と言ふは、則ち本願力廻向の信心なり。』

上述の親の手織りの御心を聞かされると、何人もあゝ有難いと頂く、其の信心迄が親の長の心配が私の胸に届いて下された有様なれば、則ち本願力廻向の信心である。願成就文に信心歡喜とある信心は、此の親から御與への信心のことであるとである。又

『歡喜とは、身心悅豫を形す貌なり。』

親の、その御見捨てなきお慈悲の塊りの一枚の着物であることを聴くと、

嬉しさをむかしは袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬるかな。

今迄の「何うかして」の自力我慢の着物を脱ぎかへて、身に餘る親の手織りを纏はせて貰ひ、身も心もはれぬと、餘りのお慈悲の嬉しさに、身心悅豫の姿が表はれる有様が歡喜である。

『乃至と言ふは、多少を攝するの言なり。』

少きは一念を初めとして、一代の間喜ばせて貰ふ喜びが、乃至の一言に籠つてある。即ち此の信は始めの初一念をもととして、一代の間喜ばして貰ふ信であるぞ、との知らせてある。

『一念と言ふは、信心二心無きが故に一念と曰ふ。是を一心と名く。』

その親の御心を知らされた一念に、餘りの有難さに、南無阿

言葉通り南無阿彌陀佛々々と、口に念佛か現はれて來ねばならぬのである。聖人が『信卷』昨年度講本の處に

眞實の信心には必ず名號を具す。

と仰せられたは之を言はれたので、南無阿彌陀佛々々と念佛の出て來るが當然であります。故に親鸞聖人は信心爲本と告示し下されたればとて、念佛を稱へぬと仰せられるのでは無い。

信心ありとも名號をとらへざらんは詮なく候。(未燈抄)

とあるのであるが、併し何程着ることが肝腎であればとて、譯け分らずに唯着るのだと、一途に南無阿彌陀佛を稱へる丈けになつて仕舞つては、矢張り法然聖人の御教化を聞き違をした三百八十餘人の人達も同やうの過になつて仕舞ふのである。即ち着ぬならぬと、唯着る事丈けに力を入れて、不知不識の間に肝腎の親心の方が殺になり、南無阿彌陀佛丈けになつて仕舞ふから、聖人は今の『信卷』の言葉のあとに、名號には必ずしも願力の信心を具せざるなり。

とあるのである。即ち初めから南無阿彌陀佛の着物ぢやととなると、肝腎の其の着物を御作り下された親の御心の方をそつちのけにして、唯着物ばかりに目をつけるから、それでは折角の親の手織りが親の手織りてなくなつて來る。即ち茲が法然聖人の念佛爲本の御教化を、親鸞聖人が信心爲本と告知らせ下された所以なのである。又『和讃』の告示には、

彌陀大悲の誓願を、

ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をとらふべし。以上長くなりなが、佛願の生起本末を聞くといふに就て、申

彌陀佛と思はず頭が下りて頂く信心なれば、純一無雜の如來廻向の信である。故に二と並ぶものなき信心なるが故に、之を一心と思ふ。又一心と名ける。

『一心は則ち清淨報土の眞因なり。』

斯く頂く一心は、即ち廣大の清淨報土に参らせて貰ふ可き眞實の因であるとの御知らせである。案外長くなりたから、今席は之迄と致します。(第三回夏季求道會第四日第一席)

## 第八席 願成就釋

### 一 清淨報土の眞因

前席は佛願の生起本末をながくとお話した。つゞまる處は、私の淺間しく、煩惱興盛の有様を佛は初めに於て總て御覽になり、大悲の心遣る瀬なく、悪しき者程彌々不便で捨てられぬとのあなたの御眞實の外に無いのであります。

さて前席で申した最後の言葉に、

『一心は則ち清淨報土の眞因なり。』

こは『和讃』の言葉に

不思議の佛智を信ずるを、報土の因としたまへり、

信心の正因うることは、かたきがなかなになほかたし、清淨報土の眞因なることは、なか／＼一通りのことと無し、私がこの淺間しきとん底迄を知召し、飽く迄哀はれみ捨てさせ給はぬ、不思議の佛智を信ずるが正因だとてあります。

又『歎異抄』の御教化には

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなることとあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、ひとへに悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。

又言はく、彼の國の衆生若し當に生れむ者、皆悉く無上菩提を究竟し、涅槃の處に到らしめん。何を以ての故に。若し邪定聚及び不定聚は、彼の因を建立したまへることを了知すること能はざるが故なり。

此の御文は以前から始終讀ませて貰ふ御文であるも、意味が充分頂けなかつた。漸く數月前より段々に有難い文であることを知らせて貰つたのであります。先づ「彼の國に當に生れん者、皆悉く無上菩提を究竟し、涅槃の處に到らしめん。何を以ての故に、邪定聚及び不定聚なる、眞の思召を頂かぬ者は、彼の因を建立し給へることを了知すること出來ぬが故である」との意である。彼の因は即ち南無阿彌陀佛の六字の着物であります。今佛が彼の困たる此の六字の手織りをお建て下されたは誰の爲めてあるか。他の着物が着れる人の爲めてない、如何なる着物も着れぬ自分の爲めてあることを頂かぬ者が、即ち佛のお慈悲を無にして居る邪定聚不定聚の類である。故に裏から言ふ時は、我々が信を頂くは、此の六字の因を建立し給へるは、他の着物の着れる善人の爲めてない、着れぬ汗かき亂暴者の自分の爲めに、態々お作り下すつた手織りであることの眞に知れたのが、彼の因を建立したまへる

したまへることが了知出來たのである。故に聖人の常のお喜びにも

彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、親鸞一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしたちける本願のかたじけなさよ。

聖人の常の御喜びも、彌陀の五劫思惟の願は、この仕て見やうなき親鸞一人が爲めに、長の御苦勞であつたのである。されば斯く迄若干の業をもちける身にてありけるを、能くも／＼お見捨てなき思召の恭けなさよと、最早や此の外は無ないのであります。

殊に今程の『歎異鈔』の御示しは、ひどい。「願をおこしたまふ本意悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もつとも往生の正因なり」——他力を頼む信心が正因とあるのなら分るけれども、悪人が正因とある。こは斯かる悪人をばお見捨てなき御眞意を頂いた、五逆十惡の悪人が參らせ

### 二 現生十種の益

さて之よりは次になりて、

獲得金剛眞心者、横超五趣八難道、必獲現生十種益。何者爲十。一者冥衆護持益、二者至德具足益、三者轉惡成善益、四者諸佛護念益、五者諸佛稱讚益、六者心光常護益、七

ことを了知出來た味ひとなるのであります。處て之が「信心の正因あることは、難きがなかなほかたし」て、なか／＼輕いことと無い。誰だつて他より着物やらうと言はるれば、一應有難く無い者は無いのである。併し夫れが親の手織りである、他の着物であると、その區別はなくて、何でもかまはぬ下されやうといふのだから有難い、といふのでは未だ眞に彼の因を建立したまへることを了知出來たとはならぬのである。今同じ佛でも阿彌陀佛の特に諸佛にすぐれて有難いといふは、阿彌陀佛のは、私共到底善く出來ざる、惡の止まぬ者、斯くいふても初めから我々は出來ぬ者だときめ込んで居るのではいかぬ。併し今日迄、もつと善くなり度い／＼して、一生懸命やつて可かぬて現に困つて居るのである。其の私に對して、「汝が何程力を盡くしてもよく出來ぬことは我は能く知つて居る。そのやうに何程善く仕度い／＼とあせつても、到底汝は善く出來ぬ、その善く出來ぬが我は哀はれて、その汝を飽く迄捨てず、その汝に纏はせてやり度いばかりに與へやうといふ吾が苦勞の塊りの一枚の手織りの着物である。之を作つたは、如何にも汝の惡の止まざる、助け無き様が可哀相で捨て置けぬからである」と、突きつけられたる親の一枚の手織りなのである。故に此の仰が心にはまつて「如何にも此の六字の手織りのお恵みは私が此のよるべ無き、助けなき爲めにやらうとある親の御親切の塊りであつたか。私の詮すべなきを初より知召して、長の間の廣大の御哀れみてあつたか」と、初めて多年不足で悶え苦しんで居た者が、その御心一つに満足させて貰ふことの出來たのが、初めて彼の因を建立

者心多歎喜益、八者知恩報德益、九者常行大悲益、十者入正定聚益也。

私共、斯く彌々自分は申譯けなき者と頭が下り、お見捨てなき御まことの有難やと、この金剛の眞心を獲得すれば、不思議なる哉その一念に、横に五趣八趣の道を超越する。

五趣八難は、地獄餓鬼畜生人間天上の有らゆる迷ひの境界及び夫れ等の諸の難である。夫れ等を不思議の御哀れみにて横に一邊に飛び超えさせて貰ひ、現生に十種の益を獲させて貰ふ。こは何も十種と限らぬ、實はもつと何れ丈けても言へる不思議の德益を蒙るのであるけれども、天臺に現生に十種の勝利といふことがあるから、夫れにならひて茲にも十種を數へ給ひたのである。現に『略文類』の文には、

信を發して稱名すれば、光、攝護したまふ。亦現生に無量の德を獲。

と仰せられてあつて、實は無量の德なのであります。そこで先づ

『一には冥衆護持の益』

こは有難いことにて、一念の信心を頂けば、冥々の間に天地間のありとある冥衆、即ち十方の諸佛諸菩薩はもとより、有らゆる天神地祇、日月星辰迄が、冥々の間に私を護持し、養育して下さる德益を蒙るとである。こはよく言はれる如き、私共を取り周く人世の有らゆる事々物々には、皆な佛力であるといふ如き淺薄な意味では無い。何うかといふに、私共の心中に、不思議なる哉この廣大の御心を頂けば、殆んど有る可ら

ざる。その廣大の恵みの爲めに起つて来て、思ひがけなき御利益を蒙るとである。こは信仰の経験ある者が、皆な銘々に明に感ずる處であつて、必ずある事なのであります。

今朝頂いた『現世利益和讃』の示しにも、

阿彌陀如來來化して、 息災延命のためにとて、

金光明の壽量品、 とさあきたまへるみのり也。

山家の傳教大師は、 國土人民をあはれみて、

七難消滅の誦文には、 南無阿彌陀佛をとまふべし。

一切の功德にすぐれたる、 南無阿彌陀佛をとまふれば、

三世の重障みなながら、 かならず轉じて輕微なり。

佛智不思議の故に、之等の徳益は必ずあることなのである。

又茲を『歎異鈔』の御示しには、

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信

心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍すること

なし。罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もあよぶこ

となきゆへに、無碍の一道なりと云云。

斯く諸天善神が念佛の行者を守護し、養育するばかりでなく、

諸の惡しき魔界外道迄が畏れ近づかぬとある。こは何かと言

ふに、抑々佛の廣大なる御哀れみは、盡十方無碍の照して

ある。如何程罪重く、淺間しき私と雖、更に隔てず、飽く迄

捨てざる無碍の光を以て照らし下さるやせなきお慈悲の

故に、遂に如何な私も、その私の煩惱惡業を隔てぬ無碍のお

慈悲の爲めに打ち負かされ、即ち五分々々の我々に、

五分々々以上のやるせなき親切を以て恵まるゝ爲めに、遂に

如何な五分々々の私もその五分五分以上の親切の爲めに打ち

無い。その上坊さんも自分について行くといふのである。併

し此の方は如何にしても合點がゆかぬ、何ういふ積りて行く

のかと、坊さんの所へ行つて尋ねて見た。すると坊さんの言

はれるには、「平太郎さんのやうな具合で、聖人も平太郎さん

には參れと仰しやつたのである。故に今度もお上から行けと

あるのだから、行かして貰ふばかりぢや。郷に入つては郷に

隨へである」との説明を與へられた。けれども、何うも其の

方は眞面目な方故合點がゆかぬ。故に行くは行つたが、一體

何ういふものかと、斯ういふ眞面目な尋ねに接したのであり

ます。そこで私は「成る程、夫れで貴方は何う考へられる」と

尋ねて見た。すると「自分は信仰上より何う考へても參れ無

いと思ふ」と言はれる。「夫れでは貴方はその時何ういふ心で

參つたか」仕方が無いから自分は、皆なが二重橋に集つてお

見舞ひを申上た心持で參つて来た」と、こういふ話である。そ

こで私は「成る程夫れでは大分六かしい。夫れは貴方は平

太郎の話を半分丈聞いて居るのだから可かぬ。平太郎のは

何ういふ事かと言ふと、聖人は平太郎に何も嚙つてついで行

けと仰しやつたのでは無い。成る程汝熊野に行くか、行くに

は第一に、

愚禿勸るところ更に私なし。しかるに一向專念の義は往生

の肝腑自宗の骨目なり。すなはち三經に隱顯ありといへど

も、文といひ義といひ、ともに明なるをや。大經の三輩に

も一向と勸めて、流通にはこれを彌勒に付屬し、觀經の九

品にもしばらく三心と説て、これをまた阿難に付屬す。小

經の一心つゝに諸佛これを證誠す。これによりて論主一心

負かされ、畏れ入つてその廣大の御まことを頂くと、勿體な  
い哉我々の根性は五分々々である、けれどもその私の心に五  
分々々ならぬお見捨てなき佛のお心が届いて下さる爲めに、  
五分々々の障りを爲す惡魔鬼神もその障りをなすことが出来  
ず、況んや諸の善を助くる天神天祇は、皆な敬伏して信心の  
者を守護し養育するのである。故にこの冥衆護持なることは  
信仰上必ず然らざるべき事にて、既に聖人の上にする時は、  
聖人が箱根御通行の時には箱根權現が之を招待して種々もて  
なしたことや、又平太郎熊野參詣の事もするのである。併し  
茲は往々誤解を來しやすい處であるから、今少しく力を入れ  
て話すことと致します。

### 三 平太郎熊野參詣の意義

私は本年春廣島縣に參つた。丁度此の度には、有栖川宮殿  
下の御薨去にあひ奉り、明日は當會に於ても御奉悼の營みを  
させて貰はふといふ際であるから、時節柄聊か適切過ぎるか  
も知れぬが、前年 先帝陛下御不豫の際に、各地に於て 御  
回慮の御祈禱をするといふことがあつた。それで下々に至る  
迄、皆な神社にお參りを仕た。處て今春私を招かれた或地方  
のお方といふは、廣島縣の或郡役所の郡書記をつとめて居ら  
るゝ青年の方で、丁度その時自分の公職の關係から、祈禱の  
爲め神社に參れとのことと、何うでも參らねばならぬはめに  
なつて來た。處てその方は平素他力を喜んで居らるゝ方故、  
眞宗は難行を嫌ふのである。夫れに祈禱の爲め神社に參るは  
をかしいと考へたけれども、參れとのことであるから仕方が

と判じ、和尚一向と釋す。しかればすなはち何の文による  
とも、一向專念の義を立すべからざるぞや。

先づ何事よりも一向專念の義は何處迄も動いてならぬとさ  
としになつたのである。故に今汝熊野にゆくにしても、

證誠殿の本地、すなはちいまの教主なり。かるがゆへにと  
てもかくても衆生に結縁のこゝろさしふかきによりて、和

光の垂迹を留めたまふ。垂迹をとゞむる本意、たゞ結縁の  
群類をして、願海に引入せんとなり。しかあれば本地の誓

願を信じて、一向に念佛をこと、せん輩、公務にもしたがひ  
領主にも駆仕して、その靈地をふみ、その社廟に詣せんこ

と、更に自身の發起するところにあらず、しかれば垂迹に  
おいて内壞虚假の身たりながら、あながちに賢善精進の威

儀を標すべからず。たゞ本地の誓約にまかすべし。穴賢々

熊野權現は、即ち本地は今の教主が衆生に結縁の爲め假りに  
權現と現はれて下されたのである。故に根本の本地の本願を  
信じて、唯南無阿彌陀佛々々といつもの如く念佛を喜んで  
參ればよい。この本願を信じて參る上からは、何も神參りだ  
とて殊更虚假不實の身でありながら、改まつて賢善精進の眞  
似を仕なくともよい。唯何處迄も本地の誓願に任かせて、南  
無阿彌陀佛々々と、念佛一つで參れよと仰せられたのであ  
る。故に平太郎のは、何かなしの神參りとは、意味が違ふ  
と、この意味のことをお話した處がその方も「初めて分つた」  
と、大に喜んで下されたのであります。平太郎にする時は、  
聖人のこの仰せを頂いて、「道の作法とりわき、整儀なし。た



「常後の凡情にしたがつて、さらに不淨をも刷かきとことなし。行住坐臥に本願をあふぎ、造次さうじ顛沛にも師教を守つて」熊野に參詣すると、果して參着の夜夢中に一人の衣冠正しき俗人が、證誠殿の扉を押開いて一旦は「汝何ぞわれを忽とつし緒して、汗穢不淨にして參詣するや」と詰責した。がその時聖人忽爾として現はれ、「彼は善信が訓によつて念佛するものなり」と仰せらるゝや否や、その俗人は、その聖人の言葉を聞くなり、忽ち様子を變へて大に敬屈の意を表した、と見る程に夢が醒めたのである。即ち廣大なる佛の御まことを喜ばして貰ふて居ると、何も殊更内境虚假の身を以て、賢善精進の威儀を標するでは無い、唯常没の凡情に任かせて、ひたすらお見捨て無いか慈悲を喜ばして貰ふて居るばかりであるが、其の喜ぶ者を權現——即ち天神地祇の諸の眞衆は深く喜び護り給ふと言ふのである。併しながら今の頂き所の根本を忘れてしまふと、この眞衆護持なることは、單純に念佛をすると諸の眞衆が護つて下さるのだといふ、妙なことになつて仕舞ふ。然うては無い。南無阿彌陀佛の眞實は、人生有りとする罪惡障碍を最後迄お見捨てなき唯一の大悲の御親心である。故に之を頂けば、天地間の諸の眞衆も、その頂いた廣大の親の御心に對し喜び護つて下さるとなるのであります。

四 某縣師範學校の方の一例

猶ほ言ひかけた序にも一つ申すと、前年文部省に教育講習會が開かれたことがあつた。其會に或る縣の師範の教員を爲されてる方が上京出席せられたのであります。處が其時が丁

文部省も國民の思想が亂れぬやうに言ふのであるけれども、信仰が無い爲め言ふとに統一がないのであるから、そこを遠慮なく言ふのが、決して文部省に不忠で無いのみでなく、寧ろ然うするのが教育に忠なる所以である。その證據は今の平太郎熊野參詣の故事で、成る程形は上の言ひつけ通り熊野に參つて居るけれども、その實信仰の立場でやつて居るのであるから、更に矛盾する處が無いのである」と申したら、その方は大に喜ばれ、「信仰の上にはそんな道があつたか」と、その通り縣に歸りてお話しになつたのであります。してその後私はその縣下に御縁あつて參つた時、二三教育界の人達にその時のその方の報告のことを聞いて見ると、信仰のある人は有難い報告だつたと言つて居られるし、無い人は、果して何事もなき極めて無事な報告だつたと思ふて居られる。故に茲は大事のところで、斯く私共はこの眞の慈悲、南無阿彌陀佛一つに立たせて貰ふとなつと、如何なる場合に於ても、相手方に不實となるやうなことが無い、ばかりでなく、その南無阿彌陀佛でやらせて貰ふことが、即ち國家の爲め教育の爲めとなつて來るのであります。故に親鸞聖人の名高きお言葉には

朝家の御ため國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらは、めてたくさふらふべし。

とある。處が大抵の人は此のお言葉を言ふ時は、意味が逆になり、世間に順應すること考へて仕舞ふから、肝腎の念佛の方はそちのけとなり、イヤ、だから殖産興業を言はんならぬ、イヤどうである斯うであると、折角の朝家の御爲め國民の爲めの念佛の意義が、甚だ妙な間違にちちて居る。一體この

度例の南北朝正閏問題が起つて居つた際なので、其の會に於ても夫れ等の邊から種々六かき見解を聞かされた。が信仰ある者の頭で聞くと、その説明が甚だ氣に喰はぬ。併しながら自分が代表出席したとなると、縣に歸りてその聞いたことを報告しなくてはならぬ。處がその方はその時で三年程續けて出席せられたのであるけれども、夫れ迄は倫理研究の立場で、いつも歸つて聞いた處を報告して通つて來た。處が何分にも今度の講習會で聞かざる、事柄は氣に喰はぬ、自分の信仰と全然矛盾する。故によい加減で通る人ならば信仰は信仰、世間は世間と兩刀使ひてすますとこなれども、其方にする時は然らぬ不眞面目な考へては濟まされ無い。故に斷然決心して私の許に相談に參られたのであります。言はるゝには、「私はもう堪を切れない、斷然辭職して仕舞はうと思ふ。何うにも今度の講習會の内容は氣に喰はぬ、自分の信仰とまるで撞着する。故に逆もこんなことを自分の口より人に聞かす譯けにはゆかぬ。故に辭職するより仕ようが無い」と、こういふお話である。私は聞いて、如何にも眞面目な考へて、こんな眞面目な話は世に少からうと思ふたのであります。併し私が申したには、「如何にも眞面目な話であるけれども、併し私からいふと、まだ充分で無い處である。成る程講習會で聞いた通り報告仕なければならぬであらうから、一應その通り報告して、併しその上で自分の考へてはこれでは目的が達せられぬ。この目的を達するには、何うしても信念上の立場からこれ」と、全然自分の信仰上から報告したならばよろしいか。斯くするのが決して文部省の意に順はぬことになるのでは無い。

御言葉は、この會の閉會の日には、特別の思召を以て淺草本願寺に於て、聖人より性信坊に下された「教行信證」の御眞筆を拜見させて頂くこととありますが、その性信坊が念佛のことにつき訴へ事を起されたことありて、其爲に鎌倉幕府の問註所に行つて居る。それに對して聖人が下さた御消息の中に在る御言葉であつて、「この度ひは念佛のことに訴へ事があつて鎌倉に出て居るさうであるが、氣の毒のことである。夫に就き大師聖人の世にも、念佛を悪しく言ひなす者があつて、念佛を停められたことあつたが、その時には世にくせごとが起つて來た。故に又念佛に仇をなす者がある時は、その爲に世に如何なるくせごとが起らぬとも限らぬ。故にさういふことの無いやうに、苟も念佛を喜ぶ者は設へ人が憎むことあつても、憎みかへすことなく、飽く迄世の中に間違ひがないやうに、心に入れて念佛を喜ばねばならぬ。

詮じさふらふところは、御身にかぎらず、念佛まふさん人々は、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらは、めてたくさふらふべし。往生を不定におぼしめさん人は、まづわが身の往生をおぼしめして御念佛さふらふべし。わが御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛ころにいられてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとおぼしめすべしとぞおぼえさふらふ。云々。

とある御言葉なのである。今日普通に世間で言ふて居る意味とは大分譯が違ふのであります。即ち斯の如き廣大の徳益あ

るお念佛なれば、此の念佛のお慈悲が總ての人の心に届くならば、自から世の中は安穩に、國安く民安くなる。故にどのやうな場合に於ても、このお念佛一つを稱へることが、最も朝家の御爲め國民の爲めとなる。故に設ひこの念佛の爲めに、自分が如何なる迫害を受けることありても、その人を恨まず憎まず、却つて圖々しく片方は念佛に仇を加へるに、此方は念佛を稱へて、「世の中安穩なれ、佛法弘まれかし」と、その人の上を案ずるにつけても、彌々念佛を喜ばせて貰ふといふやうになる。斯く聖人が何度迄も他を憎まず、飽く迄此の念佛一つを喜ばれたは、即ち今席言ふ如き、斯くの如き無量の徳益ある廣大のお念佛にてましますからである。故に『歎異鈔』に於て

親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたることをいまださふらはず。云々。

と仰せられた聖人が、今の如くこの廣大な力を仰ぐ上からは、朝家の爲め國民の爲めにも唯この念佛一つだ。といふ如き今の御教化となり、又先き程の現世利益和讃のお示しには、あの外にもまだ

- 南無阿彌陀佛をとまふれば、この世の利益きはもなし、
- 流轉輪廻のつみきえて、定業中天のぞこりぬ。
- 南無阿彌陀佛をとまふれば、梵天帝釋歸敬す、
- 諸天善神ことごとく、よるひるつねにまもるなり。
- 南無阿彌陀佛をとまふれば、四大王もろともに、
- よるひるつねにまもりつゝ、よろづの惡鬼をちかづけず。
- 南無阿彌陀佛をとまふれば、堅牢地祇は尊敬す、

その廣大な南無阿彌陀佛なれば、『和讃』のお知らせには、

五濁惡世の衆生の、選擇本願信すれば、不可稱不可説不可思議の、功德は行者の身にみたり。汗かきの亂暴者の私に、着させ度いと一枚の手織りの御心が頂かれて、有難やとその手織りを親しく身に纏はせて貰ふて見れば、「不可稱不可説不可思議の、功德は行者の身にみたり」と、何ぞ知らん一枚の親の手織りの着物なれども、實に質素で丈夫で、破れずよごれず、實に無量の至徳がその一枚の手織りから、身に充ち満ちて下さるのである。又

『三には轉惡成善の益』  
飽く迄煩惱惡業の私が、不思議なる哉この御見捨てなき大悲の御まことを頂けば、但廻心して多く念佛せしむれば、能く瓦礫を變じて金と成らしむ。

瓦、礫が變じて黄金と成る。人生「これは困つた」「困難である」と惱んで居つた事柄も、ひと度びこのお慈悲を頂き、内心が展開して来れば、今迄の悩み、困難と考えた問題も、忽ち何處へか消失してしまつて、一味の喜びと轉じて来る。この味は信仰ある人々の、常に經驗して居る通りであります。次には又

『四には諸佛護念の益、五には諸佛稱讚の益』  
こは此の世に於ける諸佛の御利益を喜ぶやうで可かぬといふ考があるかも知れぬ。併し阿彌陀佛は諸佛の本地本佛故、阿彌陀佛を喜ぶ者を諸佛も共に護念し、稱讚して下さるとある。併し茲は少しく明にしておかねばならぬ。それ十方の

かげとかたちのごとくにて、よるひるつねにまもるなり。南無阿彌陀佛をとまふれば、難陀跋難大龍等、無量の龍神尊敬し、よるひるつねにまもるなり。南無阿彌陀佛をとまふれば、炎魔法王尊敬す。五逆の眞官みなともに、よるひるつねにまもるなり。南無阿彌陀佛をとまふれば、他化天の大魔王、釋迦牟尼佛のみまへにて、まもらんとこそちかひしか。天神地祇はことごとく、善鬼神となづけたり。これらの善神みなともに、念佛のひとをまもるなり。願力不思議の信心は、大菩提心なりければ、天地にみてる惡鬼神、みなことごとくおそるなり。南無阿彌陀佛をとまふれば、觀音勢至はもろともに、恒沙塵數の菩薩と、かげのごとくに身にそへり。無碍光佛のひかりには、無數の阿彌陀ましゝて、化佛のくことごとく、眞實信心をまもるなり。南無阿彌陀佛をとまふれば、十方無量の諸佛は、百重千重圍繞して、よろこびまもりたまふなり。極まりなき大悲の親心の塊の南無阿彌陀佛である、故にその親の遣る瀧なき御心配の、如何にも雖有い御心配である所を頂くと、同時に自然に之等無量の廣大な徳益が信徳として身に得させて頂かれるのであります。

五 至徳具足の益等

次には 『二には至徳具足の益』

諸佛には、皆な夫れく各佛々に別願がありて、釋迦佛には釋迦佛の別願があり、薬師には薬師如來の御本願がある。併しながら今私共はその諸佛の本願では、到底通れぬ救うて貰はれぬ。何故なれば諸佛の教えの如く、戒定慧の三學が出来ぬなら、我々も諸佛の救ひに預ることも出来るのであるけれども、如何にせん五逆十惡の惡人である、如何なる醫者にも見離されたる極重の病人である。處が今茲に思ひがけなく一人の名醫が現はれて、「その總ての道の絶え果てたる病人の爲に本願醍醐の妙藥をこしらえた、この藥はその不治の病人に飲ませる爲めに作つた藥であるぞ」とある阿彌陀佛の本願なのである。故に苟も病を直す醫者であり、衆生を助けて下さるが爲めは一切諸佛でましますからは、自分の手では力及ばず持て除して居る處へ、此の思ひがけなき廣大な藥が現はれたからは、如何なる醫者も之を用ゐぬといふことは無い。世界中の醫者が皆な同音に、「あ、誰それの特効藥が現はれた」と、聲を揃えて稱賛してその藥を用ゐるが如く、一功の諸佛が皆な聲を合はせて、阿彌陀佛の威神功德の不可思議極まりなきを讚歎し、その廣大なる特別のお藥の思召を、眞に能く頂いた者を、能く頂いたと護念して下さる。之が諸佛の護念であり、諸佛の稱讚なのであります。處が又我々は、動もすると阿彌陀佛ばかりを專念して、諸佛を拜まぬは、何とやら諸佛に濟まぬやうな思ひがし、又諸佛に向ふと何やら阿彌陀佛に濟まぬやうな思ひを凡夫心で抱き易いのである。處がこはまだ自分が諸佛の本願で助かれる如き餘地のある輕症の病人と考えて居るから起る間違ひで、我々は最早や如何なる醫者

にも見限られ、どのやうの薬でも間に合はぬ、極重悪の病人なのである。さればこそ茲に阿彌陀佛の不可思議の特別の薬は現はれて下された。故に茲は何も此方へ来い、とある病人のやり取の話では無い。夫れを私共手前の根性でそちらへゆかず此方へ来よとの仰せと取るから、何やら阿彌陀佛が諸佛を斥け給うやうに思はれて来る。諸佛の思召にする時は、諸佛とても助けやり度いは一杯であるが、残念ながら極重の病人故、諸佛の本願では最早や仕やうが無い、助らぬ。そこへ思ひがけなく廣大な阿彌陀佛のお救ひが現はれて來たのであるから、今は此のお慈悲でなげにや、といふ處から『彌陀經讚』には、

諸佛の護念證誠は、  
悲願成就のゆへなれば  
金剛心をえんひとは、  
彌陀の大恩報すべし。  
恒沙塵數の如來は、  
萬行の少善さらひつゝ、  
名號不思議の信心を、  
ひとしくいとへにすゝめしむ。

萬行の少善は即ち諸佛御自身の善であります。その御自身の善では可かぬと嫌ひつゝ「名號不思議の信心を、ひとしくいとへにすゝめしむ」とある諸佛の各方面からの御勧めなのである。佛を頂け、とある諸佛の各方面からの御勧めなのである。而してその南無阿彌陀佛を頂く故に、此の度びはその者を諸佛が護念し稱讚して下さるとなる。故に阿彌陀佛を専念すると諸佛に濟まぬなどいふは、未だ佛の御眞意が頂けぬ、凡夫心に過ぎぬのであります。

### 六 心光常護の益等

處て何故人並みに喜んで居る者のことではないかといふに、抑々親が辛苦して手織りを織り上げ、仕立上げたといふものは、外の着物が着れぬ者に着せ度いと言ふに外ならぬのである。爾るに折角親の手織りを手に仕て居ながら、外の着物も同やうに考えて、親のも有難いがまた斯いふのもある、あ、あ、いふのもあると、あれを見、之を見仕て居るのでは、親はもどかしくて満足することが出来ぬのである。故にさういふことでは、親の御心配はまだ寸分も頂かれて居ぬ。處が親は然ういふ浮いた聞き方であることをば彌々造る瀬無く思召し、飽く迄、お慈悲が深い爲めに、遂に私の心に一念お慈悲の不思議が分つて來て見ると、今迄世間並みの着物のやうに思つて居たに、實に思ひ懸けない間違であつた。――

嬉しさを昔は袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬる哉  
昔は他と等しなみに、唯有難い、と言ふて居たのであつたが、今はその有難い御心を聞き分けさせて貰ふて見ると、思ひがけなくもこの慈悲は自分如き悪人を捨てぬとの廣大なる御親切であつたのである。故に「あ、如何にも自分如き極悪人の爲めに作つて下された一枚の手織であつたか」と、初めて正雜の分別を聞き分け、一向一心になりて廣大なる親のお心を頂いて見ると、尤て今迄とは、雲泥も當ならぬ嬉しさの相違である。故に

身のをきどころもなく、ちどりあがるほどにももふあひだ、  
よろこびは身にもうれしさがあまりぬるといへるこゝろなり。(御文)

次ぎに、

『六には心光常護の益、七には心多歡喜の益』  
その廣大な特別の思召が、私の心に徹到して、初めて有難やとその御心を腹一杯に頂くと、佛も初めて御満足下されて、佛の心光常にその者を照らし護つて下される。處ては親が態々私如き亂暴者に着せ度いと作り下された一枚の手織りの着物であるを、俗も人並みの着物貰ふたでもあるやうに、唯ハイ、と言はれた儘に着て居る者のことには無い。善導大師の御文には、  
但阿彌陀佛を専念せる衆生のみ有つて、彼の佛の心光常に是の人を照らして、攝護して捨てたまはず。總て餘の雜業の行者を照攝するを論ぜざるなり。

と言はれてある。又『選擇集』になると茲のお示しは一層ひどい。  
彌陀の光明は餘行の者を照らさず、唯念佛の行者を攝取したまふの文。  
と見出しを擧げて、「觀無量壽經に云く」とし、  
一一の光明遍く十方世界を照らして、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。  
と經文を引かれてある。即ち唯護つて下さる位な段では無く、十方の世界の念佛の衆生を一々攝取して、捨てぬとある仰せなのである。又常に頂く『歎異抄』のお示しには、  
彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて往生をばとぐるなりと信じて、念佛まふさんともひたつ心のおこるとさ、すなはち攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。

心多歡喜は即ち之なのであります。故にこの味ひは、唯一應有難い位のことでは分らない。私の淺間しさが哀はれ、の長の大悲の塊であることに夜が明けた味ひが、この心多歡喜なのである。而して斯く私の方が親の御心配に腹一杯満足すると、親も初めて「あ、能く聽いて呉れた。如何にも夫れでこそ……念佛まふさんと思ひ立つ心のおこる時、すなはち攝取不捨の利益には預けしめたまふなり。」――まだ口に念佛が現はれずとも、その親の思召に腹ふくれた一念が、はや攝取不捨なのである。こは人間にしても、彼の人の爲めに斯く、仕てやり度いと、何程心を運んでも、夫れを先方が受けて呉れぬ時は、十年の辛苦も何もならぬ。處が夫れが兩三年の後、――乃至死後に於てなりとも――即ち此の間貝島翁が「死ぬだ自分の友達が生前色々言ふて呉れたは、實に之を言うて呉れたのであつた。夫れ程迄に言ふて呉れたのに、夫れを彼れ是れ言うて居つたは、實に自分がすまなんだ、こらえて呉れ」と(昨年度第六號參照)斯う先方がなつて來ると、「イヤ、わしの志をとら、お前は聞いて呉れたか、それさへ聞いて呉れ、ば、禮なんぞ言ふて貰ふに及ばない、わしは、も、う充分ぢや、寧ろわしの方から禮を言ふ」と、却つて受けて貰つた此の方が、何れ丈け満足であるか知れやしない。その如く大悲のお手許にする時は、衆生が不惑なばかりに長の苦勞も仕たのである。爾るにその苦勞の甲斐あつて、「とうとう南無阿彌陀佛の親の心をお前は受けて呉れたか、それてこそ自分も本望である」と、その念佛喜ばせて貰ふ身と仕て頂くと、十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし、

攝取してすてざれば、阿彌陀佛となづけられたまつる。その一念に親の方が更に満足して、光明中にをさめて下さるが攝取不捨の御利益であります。

### 七 智恩報徳の益等

さてすると

『八には智恩報徳の益』

「イヤどうもこれ程迄の廣大な御恩とは知らなんだ。一應有難い嬉しい位の話ぢやない。若しこのお恵みを知らして貰はなんだら、永劫の生をとりぞこなつて仕まふ處であつた。實にかくの如き自分のために、それ程迄の思召とは、何たる廣大の御恩であらう」と、

如來大悲の恩徳は、

身を粉にしても報ずべし、

師主知識の恩徳は、

骨をくだきても謝すべし。

恩を知り徳を報ずる思ひを自分の自力で起すのでは無い。けれども、廣大の思召を頂く處から、ひとりてに起つて來るがこの知恩報徳の益である。

『九には常行大悲の益』

これは餘りに勿體なくて、口にもかゝらぬ程である。全體大悲は佛に限つた言葉である。我々が一寸人に親切にしたりなんどする人間の善を、大悲などは言はぬ。處がその佛の大悲を常に身に行ずる益を、信の一念に私共が得させて頂くのである。これは入らざることをなれども、この『信卷』今少し後の處には『安樂集』の文を引かせられ、

大悲經に云はく、云何が名けて大悲と爲る。若し専ら念佛

恵みなのであります。而して最後に

『十には入正定聚の益』

と、その一念に攝取の心光中にをさめ取つて下さるもの故、此世に在りながら直に淨土に參るべき正定聚の分人中に加へて頂き、この世から直ちに慈悲を根底とした、大安心の生活させて頂くことが出来る。此の味ひは、慈悲を頂た人の常に經驗して居られる通りの味である。今席は之迄として、あととは次席に申述べること、致します。

(第三回夏季求道本第四日第二席)

### ●因年ふかき乙卯年

常 觀

現代思想界が餘りに物質的暗黒面を有する事の多量なるを自して、直に悲觀す可き現象なりと連断するもの少からずと雖、一面より考ふれば、人生の眞實なる暗黒面の暴露されつゝあるは、却て現代思想界の何れかに回轉せんとする道程にあるものにて、一概に悲觀する能はざるものあり。從來の思想界は、之を政治的に言へば、未徹底なる妥協、心理的に言へば未洞觀なる主觀の何れかに陥つて、都合よき自己の心と心との妥協、絶對と相對とを忘れたる自己の主觀にのみ所へて、好い加減の妄動に安んじたる傾向ありし。是等の思想は實際生活の經驗の結果に由つて片端より崩壊し盡され、其一方よりは少し眞面目にして、不變の根底ある徹底的信念なるものを要求されつゝあるは、是れ自然の勢ひなり。即ち凡そ世界のある罪惡、虚偽若しくは假善なるもの、總てを感化し盡くすべき、權威ある絶對眞實なる信念が、之に代つて必要とならざるを得ず。自分は絶對眞實の火に由つて人生の總ては必ず燒き盡され、又掃ひ清めらるゝものと堅く信じ、堅く奉じて疑を挟まざるものなり。今新に迎へんとする乙卯の年は、古來より信仰上或る種の意味を有し、大に爲さしむる因縁ありたる年なるを以て、幸に希望の目を以て之を迎へんとす。(中外商業新報)

相續して斷へざる者は、其の命終に隨つて、定めて安樂に生せむ。若し能く展轉して相勤めて念佛を行ぜしむる者、此等を悉く大悲を行する人と名く。

とあつて、實にそらひ言葉である。即ち念佛を喜ぶ者を、悉く大悲を行する者と名けるとの仰せてある。處ては何うかといふに、我々が廣大な慈悲を知らせて頂くと、其の知らせて頂いた慈悲が慈悲である。我々が人に親切にしたりすることなどが大悲ぢや無い、頂いた南無阿彌陀佛が慈悲なのである。これは『歎異抄』の知らせにも、

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり。しかれどもおもふがごとくたすけとぐることはめてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛まうすのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にてさふらふべきと云々。

とあつて、即ち念佛ばかりが、大悲心なのである。故にその念佛を頂いて、南無阿彌陀佛々々と自分も喜ばして貰ひ人にもその廣大な思召しを傳へて共に喜ぶ、之れが私共のづから佛の慈悲を身に親しく行はせて頂いて居るものなのである。而してこれは私共、自ら仕やうとして出来る事でない、佛の慈悲が届いて下さる所で、自ら企てざるにひとりて然らういふ風になる。即ち廣大の慈悲の上より、與へて下さる

## 講 義

### 歎 異 鈔

近 角 常 觀

### 第十三章 (續)

「これにてしるべし、なにこともころにまかせたることなれば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし、しかれども一人にても、ころすべき業縁なきによりて害せざるなり、わがころのよくてころさぬにはあらず、また害せじておもふとも、百人千人をころすともあるべしとおほせのさふらひしは、われらがころのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることをおほせのさふらひしなり」如何にもキビ／＼したる快刀亂麻を斷つが如き御教誨である、毫髪にても我等が我等自身の心を統御、支配、自制することが出来ると思ふならば大間違である、若し夫が自己の意に任せて思ふ様に出来るものならば、往生の爲に千人殺せと思へば、即時に殺し得らるべき筈である、然れども一人に

ても殺すべき業縁なきによりて殺すことが出来ぬのである、決して我心の善なるがゆへに殺さぬのではないと、キツバリ言ひ放ちて、たとひ人を殺さぬとて毫髪も我善が出来ると思ふべからずと教誨し給ひたのである、其代りには殺さじと思へども業縁のために催されて思ひ掛けもなく百人千人を殺すともあるべし、さればとて我悪きがゆへに助からぬと歎くべからず、此の如き悪しきものを特に悲憐於哀したまふ大悲大願である、故に一たび此本願の不思議を信じ奉れば、決して我心の善きを善しと誇るべからず、又悪しきを悪しとして失望落膽すべからず、實によしあしを知らぬ、是非邪正も分かぬ、凡愚下劣の我等である、

よしあしの文字をもしらぬ人はみな、

まことのこゝろなりけるを、

善悪の字しりかほは

おほそらことのかたちなり。

是非しらず邪正もわかぬ

この身なり

小慈小悲もなけれとも

名利に人師をこのむなり。

如來の本願の前には善として誇るべからず、悪として歎くべからず、されば正信偈には一切善悪凡夫人、聞信如來弘誓願、といひ善導獨明佛正意、於哀定散與逆惡といひ、又本源空明佛教、憐愍善惡凡夫人と仰せられてある、而して此本源は善導大師の弘願釋の一切善惡凡夫得生者といふより流れ來りたのである、前に引きたる口傳鈔善惡二業の事の章後半に詳しく示されてある、曰く

おほよそ、凡夫引接の無縁の慈悲をして、修因感果したまへる別願所成の報佛報土へ五乘ひとしくいることは、諸佛いまたおこさる超世不思議の願なれば、たとひ讀誦大乘、解第一義の善機たりといふとも、おのれか生得の善ばかりをもてその土に往生することかなふべからず、又悪業はもとより、もろ／＼の佛法にすてらるゝところなれば、悪機また悪をつのりとしてその土へのぞむべきにあらず、しかれば機にむされつきたる善惡のふたつ、報土往生の得ともならず、失ともならざる條勿論なり、さればこの善惡の機のうちへにたもつところの彌陀の佛智をつのりとせんより、おほは、凡夫いかでか往生の得分あるべきや、さればこそ惡もおそろしからずといひ、善もほしからずとはいへ、こゝを

然るに我等の心のよきをばよしとおもひ、あしきことをあしとおもふは、全く凡夫の計ひにして如來の思召を疑ふのである、如來の計ひを斥くるのである、歎異鈔の結章にも「聖人のおほせには善惡の二つ總じてもて存知せざるなり、そのゆへは如來の御こゝろによしておほしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきを知りたるにてもあらめ、如來のあしとおほしめすほどにしりとほしたらばこそあしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそおほせはさふらひしか」とある、善しといふも、悪しといふも凡夫の五分五分の計ひに過ぎないのである、如來の目より御覽になれば皆そらごとたはごとである、其そらごとたはごとを見捨てず、飽まで悲憐したまふ如來の御慈悲ばかりが眞實である、眞宗である、眞中の眞である、念佛成佛は眞宗である、世間虚假惟佛是眞である、是が本願の不思議である、義なきを義とすである、此如來の御計ひをいたへば、我等のよきをばよしと思ひ、あしきをあしと思ふは全く凡夫の計であることが分かる、善が善として何の効もなく、悪が悪として何の障もなし、故に

もて光明寺の大師、言弘願者如大經說、一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲増上縁也とのたまへり、文のこゝろは大經の説のことし、一切善惡の凡夫のむまるゝことをうるは、みな阿彌陀佛の大願業力にのりて増上縁とせざるはなしとなり、されば宿善あつきひとは今生に善をこのみ、悪をおそる、宿惡おもきものは今生に惡をこのみ善にうとし、たゞ善惡のふたつをは過去の因にまかせ、往生の大益をは如來の他力にまかせて、かつて機のよきあしきに目をかけて、往生の得否をさたむべからずとなり、これによりてあるときのおほせにのたまはく、なんとち念佛するよりなを往生にたやすきみちあり、これをさづくべしと、ひとを千人殺害したらば、やすく往生すへし、おの／＼このをしへにしたがへ、いかんと、ときにある一人まふしていはく、某において、千人まではおもひよらず、一人たりといふとも殺害しつへきこゝちせずと云云、上人かさねてのたまはく、なんちわかをしへを日比そむかざるうへは、いまをしふるところにおいて、さだめてうたかひをなさゝる歎、しかるに一人なりとも殺害しつへきこゝちせずといふは、過去にそのたねなきによりてなり、もし過去にその

たねあらは、たとひ殺生罪をかすべからず、をかさばす  
なほち往生をとくべからずといましむるといふとも、たね  
にもよふされて、かならず殺罪をつくるべきなり、善惡の  
ふたつ、宿因のはからひとして現果を感ずるところなり、  
しかればまたく往生においては善もたすけとならず、惡も  
さはりとならずといふこと、これをもて準知すへし、

口傳鈔と歎異鈔とを比較するに、躍如として聖人御教化の  
精神活動しつゝあるは、たしかに歎異鈔である、流石に歎異鈔  
は面授口決の唯圓坊の筆に成りたるだけありて、口傳鈔に比  
較して原始的の氣分が一層漂ふてある、いかにも聖人に親炙  
した人の筆致たるのが顯はれてある、特に千人殺害の問答の  
如き、一寸の隙なき息もつけぬ問答のありさまがあらはれて  
ある、しかるに口傳鈔には、傍聴者としての描寫になりて居る  
だけ、自然間接になつてある、特に口傳鈔は如信上人の御話  
を、覺如上人が口傳されしを乗專が書かれたものゆへ、間接な  
る點はたしかに餘裕ある筆致である、されど口傳鈔は歎異鈔  
と比較するに、溫潤含蓄の趣ある點は、歎異鈔よりも聖人の御  
人格がよく顯はれてある、是は溫厚篤實の徳者たる如信上人  
の御傳へと、才氣英發の鴻才たる唯圓坊の傳へといさゝか氣

海に、凡夫善惡の心水も、歸入しぬればすなはちに、大悲心と  
ぞ轉ずなる、かく智惠の潮功徳の潮に一味になつて見れば、  
全體流の清濁大小を同ふ必要はないのである、歎異鈔結文に  
「聖人のおほせには善惡のふたつ總してもて存知せざるなり、  
そのゆへは如來の御こゝろによしとおほしめすほどにしりと  
ほしたらばこそ、よさをしりたるにてもあらめ、如來のあしと  
おほしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたる  
にてもあらめ」とあるが實に我等が心のよさをばよしとおも  
ひ、あしきことをばあしとおもふのを戒められたのである、  
私が常に言ふことなれども、實に親鸞聖人の聖訓と聖徳太子  
の聖訓と、符節を合せたるが如くである、決して親鸞聖人が  
聖徳太子の文字を追ふて書かれたるものでなきことは明らか  
なれども、眞佛敎の精神は先聖後聖を貫きて千古煥として赫  
きてある、即十七憲法の第十條に

絶<sub>レ</sub>忿<sub>レ</sub>棄<sub>レ</sub>瞋、不<sub>レ</sub>怒<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>違。人皆有<sub>レ</sub>心、心各有<sub>レ</sub>執。彼是則我  
非、我是則彼非。我必非<sub>レ</sub>聖人必非<sub>レ</sub>愚。共是凡<sub>レ</sub>夫耳。是非之  
理詎能可<sub>レ</sub>定。相共賢<sub>レ</sub>愚<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>環無<sub>レ</sub>端。是以彼人雖<sub>レ</sub>瞋、還  
恐<sub>レ</sub>我失。我雖<sub>レ</sub>獨<sub>レ</sub>得、從<sub>レ</sub>衆同<sub>レ</sub>舉。

とあるは、我等が心のよさをばよしと思ふを戒められたるも

分を異にする次第である、されど口傳鈔には覺如上人の學問  
風の解説が加はりてあることを忘れてはならぬ、何れにせよ  
從來世人が眼孔を歎異鈔に専注したるの極、口傳鈔の如き平  
易にして詳細委曲を盡したる聖人の口傳を玩味することを忘  
るが如き傾向を來したるは遺憾である、口傳鈔は聖人平常の  
寫實として頗る珍重すべき寶典である、故に今も煩しきを避  
けずして引照した次第である。

今此節を終らんとするに其要を擧ぐれば、此善惡二業につ  
きて最も戒めらるゝ所は、即結文の所謂「われらがこゝろのよ  
さをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願  
の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることをおほ  
せのさふらひしなり」とあるが眼目である、我等が善くせんと  
思ふてもよくすること出來ず、悪くせんとするも悪くする  
ことも出來ず、全く前世の業報に支配されて、毫髮の自分の心  
て自由にならぬ身でありながら、我善くせりと思ひ我惡を爲  
したりと思ふが根本の誤である、なぜこの様な心が起るかと  
云へば、我等が善といふも惡といふも畢竟相對凡夫の迷妄に  
すぎずして、絶對の本願の不思議に歸すれば、善も光なく惡  
も障なき有様となる味が分からぬからである、彌陀智願の廣

ので、前記の善惡の二、總してもて存知せざるなり云々と符節  
を合せたるが如くである。而して、聖徳太子御遺言の

#### 世間虚假、惟佛是真

は、上にも擧げたる如く、歎異鈔の引續の文の「煩惱具足の凡  
夫、火宅無常の世界はみなもて、そらごとたはごとまことあ  
ることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておほしますとこそ  
おほせはさふらひしか」と亦符節を合せたるが如くである。  
かくの如く我等よしあしの汰沙をするは畢竟本願不思議を  
しらぬからである、即ちよきも惡しきもみな虚假不實にして、  
其不實を見捨てたまはぬ眞實が念佛にてまします、本願にて  
まします、名號不思議である、誓願不思議である、佛智不思  
議である。

御一代問書二百十三條に曰く、同仰云、心得たと思ふは心  
得ぬなり、心得ぬと思ふはこゝろえたるなり、彌陀の御たす  
けあるべきことのたうとさよと思が心得たるなり、少も心  
得たると思ふことはあるまじきことなりと仰られ候と云々、  
されば口傳鈔に曰、されば、この機のうちへにたもつところ  
の彌陀の佛智をつのりとせんよりほかは、凡夫いかでか往  
生の得分あるべきやといへり、

我等の行爲の善惡の沙汰ばかりではない、信心を得たとか、心得たといふことまでが、いつの間にか御慈悲、御たすけを忘れて、得た、心得たになり安きゆへ、此點を忘れてはならぬ、さればとて、得たを言ふのを避くるの極、業に懲りて胎を啜るの風情で何事もそらごと、たはごとじやといふて、其そらごとたはごとを御見捨なき御まことを忘れ、御たすけを忘れてはならぬ、ゆへに歎異鈔結文のつゞきには、まことに我も人もそらごとをのみまふしあひさふらうなかに、ひとつのいたはしきことのさうらふなりといふて、異解を歎かれである、又此節の結びにも本願の不思議にてたすけたまふといふことをしらすることを仰せのさふらひしなりとある、又口傳鈔には彌陀の佛智をつのりとせんとよりほかは、凡夫いかでか往生の得分あるべきやと仰せられてある、全體覺如上人は何時も佛智不思議に力を入れて仰せられる、抑々歎異鈔には本願念佛同一といふことを言ひあらはすことに非常に力が入れてある、故に本願不思議といふ言が主になりてある、覺如上人は自力念佛を排して信心を主張することに力が入れてある、從て佛智不思議といふことが眼目である、即ち歎異鈔曰、本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛に

名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば往生の業まさしくさだまるなり、もし、彌陀の名願力を稱念すとも、往生なほ不定ならば正定業とはなづくべからず、我すてに本願の名號を持念す往生の業すてに成辨することよろこぶべし、とあれば、佛智といふも名願力といふも畢竟他力念佛をたもつとに外ならぬといふとは明らかである、されば本願の不思議も名號の不思議も佛智の不思議も、よきもあしきも見捨てたまはぬ、不可稱不可説不可思議の智願海大信海に外ならぬのである、是が彌陀の本願不思議におはしませばとて、惡をさそるべからずといふ、此章に闡明せんとせらるゝ焦點である。

(前巻日々田舎にありて、是といふ樂みも無之候へ共、御郵送を蒙る求道は、小生の爲に無上の生命にして、一回は一回毎に誠に有難く、一讀再讀繰返し巻き返し感涙に咽び居り候。誠に日々夜々罪惡放縱に餘念なき見る餘なき私を、捨てさせ給はね高天眞實の親心を頂き申候こと、全く尊師の賜と日夜感謝申居り候。求道の毎號、始めより終迄何れおろかば無之、皆これ親心の心血に候へども、別けて一昨年来の信巻護護は、深く味はして頂く福涙の種に有之候。際する處は知識の教へに遇ひ候はずば如來の聖人の御心の程も輕々に看過し去りしやうの放逸無悔の身が、今この徳に遇ひ奉り候事、異々も難有き事に有之、御禮申上候。家内一同は申すに及ばず、親戚知己に至る迄も四樂の下に拜禮仕り候事無上の樂みと致居り申候。小生も御かけ撥にて病氣も次第によろしき方に相向ひ申候間、何卒々々御安心被下度候。(下巻)

「堀井研丸氏より」

まさるべき善なきゆへに云々、口傳鈔曰、善のほしからざるは彌陀の本願を信受するにまされる善なきゆへに云々、歎異鈔曰、念佛はまことに淨土にうまるゝたねにてやはんへるらん、また地獄におつる業にてやはんへるらん總してもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかさねらせて、地獄におちたりともさらには後悔すべからず候、執持鈔曰、たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと聖人さつけたまふに、すかされまいらせてわれ地獄におつともさらにくやしむおもひあるべからず、」

特に執持鈔に往生ほどの一大事凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし、すべて凡夫にかぎらず補處の彌勒をはじめとして、佛智の不思議をはからふべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへすがへすも如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなりとある如き、最も佛智不思議の眞味を示されてある、されど口傳鈔に、さればこの機のうへにたもつところの彌陀の佛智とあり、又執持鈔には

告白

初めて如來の眞實に接し、六十年來聞法の非を悟る

前田 清 次 郎

私は越前の片田舎の農家の生れて、本年六十二歳になる。何の學問もなき、愚物であります。昨夏來不思議の御縁にて近角先生の御聞かせに預り、今回告白をせよとの仰せにて、甚だ迷惑なやうな感じが致しますが、謔にも耻かいて徳を取れとあり、有の儘を申上げてお糺しに預らうと思ひます。

私の生家は家代々の眞宗でうゝまして、小供の時より念佛の難有いことは常に教はり、親に連れられて始終参りほしたものであります。が後生の初めて苦になつたは、十六歳の暮であります。勿論夫れ迄も、人間は何時死ぬかも知れぬ、死ぬと地獄より行き場が無いとのことは、始終聞かされ、仕たものですから。何うか行く先きに安心を得度いと希望は、常に有つたのであります。が十六歳の暮に於て、種々の事情から俄に世の中を頼み少く感じ、彌々何うしても行く先き丈けは手丈夫な安心を得ぬならぬとの望みを起したのであります。それで田舎ゆゑ暮れの十一月には寺々に御正忌が營ま

れる。私の近くの寺に於ても他より説教師が見えて、七晝夜の間説教があつた。その説教師が所のお僧であつたけれども、大變御化導が有難いとの評判故是非とも此の方により、安心を得なければならぬと思ひ立ち、毎日々々參詣を始めたのであります。處が參つて骨折つて聞けば聞く程彌々安心が得難くなる。色々心を苦しめますけれども、益々仰せが分ら無い。その中一日々々と日數も減つて行きますので、此の上は何とかしてお僧の膝許にゆき、直接御諭しに預る外無いと思ひつきました。けれども何と言つて伺ふのか、第一伺ひ處も分りませぬ。それやこれやにてついでくれを取り、或は今日人が居るから行きにくいとやうのことで、つい出そびれて仕舞ひ、或晩の如きは今夜こそと決心して、説教が済んだあとで、居のこる積りて寝込んだ風し、隅の暗い所に隠れて居りましたけれども、あとで夫れも直ぐ見つけられ「こんな處に小僧が居る」として忽ち引きづり出されて仕舞ひ、仕方が無いから家に歸りますけれども、歸つても眠ることが出来ませぬ。そんな中に日は益々たち、四日程といふものは、御飯も喉に通らず、夜も眠られず。母が居りましたので、「何うした〜」と聞きませぬけれども、「何うもせぬ」と申して居ります。「イヤ何ともない」と母にも言はず、その中日限は彌々來ますので、今夜聞かぬ折が無いと、人の來ぬ先きを狙ひ、いきなり其處の住職と話して居らるゝ處へ、外より飛び込んで仕舞つたのであります。そして伺ひ度といふと、先方は呆氣にとられた顔付で私の顔をじろ〜眺められ、唯「感心だ

〜」と言はるゝばかり。で私は斯ふいふ譯けて參つたと申上ると、その方の言はるゝには、「その儘ぢやがや、蓮如上人様は有難いと言ふも愚かなりと仰しやる」と、斯ふいふ風に言うて聞かして下された。そんなことでその時は一先づ安心はついたのでいいます。思へばをかしなもので、私は唯も、賞めて貰ふたばかり、それで居て念佛は口に溢れ、足は地にかぬ程嬉しく、喜びに堪えなかつたので御座います。したがその中にその喜びも段々醒め、何うしたのかと、考ひますけれども、もうその後は已前のやうな煩悶も起りませぬ。何分田舎のこと故毎日御寺參りもなりませぬが、説教のある時は毎に參つて聴聞し、先づ我ながら安心が出来たが如く出来ぬが如く、甚だふら〜の思ひて其日を過して居つたのであります。

## 二

その中思ひましたには、何分田舎のこと故、少しく法に心懸けて居ると、何處へ行つて聞いても、唯感心々々とほめられるばかりで、本當のことを聞くことが出来無い。こんなことでは到底國では安心はならぬと思ひ、之は旅にでも出な可かぬかしらぬ。旅に出て設ひ如何やうの耻を掻き、設ひ乞食しても信心を得ぬことには、生れた詮もないことであると、然ふいふ風にも考へるやうになつたのであります。その明治十年、ひとつ東京に出たらと、出て參つたのであります。出て頼る處もなく、奉公を仕まして、給金は入らぬから參り丈けはと思つたのでありますけれども、奉公の身となれ

ばさらもならず、淺草築地と時々參つて居つたのでありますけれども、何うも心からの安心がならませぬ。

その明治十二年の或時、築地さんにお參りしますと、丁度御再建中であつたので、再建の使僧として、金澤の西野様と仰しやる方がお出になつてある。此の方につき安心せずば安心の時は無いつと思ひまして、ひとつ行く先きに安心さして貰つた上、氣樂に奉公仕度いと考へまして、參れぬ中を無理して、根を詰めて參つたのであります。處が矢張り聞けば聞く程安心がならませぬ。もう此の上は幾ら聞いても駄目である。或は聞きやうがぢろそかなのかとも思ひ、兩膝に爪を立て、聴聞し、下向にはいつも血で着物が膝にこべりついてある。夫れ程にして聞いたのであるけれども、やはり可かせぬ。もうこの上は何うか御使僧にすがり、直ぐ〜聞き度いと思ひましたけれども、人が來て居たりするとさうもなりませぬ。或日のこと、その時は非常に煩悶致しまして、十日程といふものは氣も遠くなり、人に何きかれたやら、とんちんかんの返事するやうになりましたので、もう捨て、置かれぬから、今日といふ今日は出られぬ中を無理して出るのである。故に今日行つて安心がならぬ時は、最早や二度と主家へは歸らぬ覺悟で出て行つたのであります。十二年八月の或日のことで、暑い最盛りでりました。

その月は大連夜の日でありましたが、説教の初まる前に行つたので、夫より説教があるのでしたけれども、最早やその日は聴く氣にもなれませぬ、假堂故御使僧は説教が濟むと自分の宿にお歸りになる。夫れを先き道に出て待ち受けて居つ

たのであります。そして御使僧の姿を見るなり、直ぐ跡追うて宿に行くと、夏の日盛り故座敷の戸障子が皆な明け放してある。御使僧は素絹五條を着して居られましたが、私が表に行つて眺め上げた時が、丁度今袈裟をはづして衣桁に懸けやうとせらるゝ處であつた。私は思はず「御使僧さん」と大聲あげると、向ふもびつくりして振り向かれ「何ぢや」と仰しやられた。「後生の一大事で參りました」と、私の飛び込んでゆくと、向ふの驚いて出て來らるゝと丁度一度であつた。御使僧も法衣を脱ぎかけた立姿の儘で「何うしたか」と尋ねられる。私が「何うしても疑ひが晴れませぬ」といふと、「オオ精出して疑へ」と仰しやられた。私は案外なのにびつくりして「疑うても宜しいかい」といふと、「ウンよい〜」と仰しやられる。「夫れでは平生の御化導と違ふぢやなりませぬか」と申上ると、「ウン違ふ、平生の説教は大勢相手故疑うてはならぬと言ふてるけれども、疑うてもよいのぢや」と仰しやられる。私は「へ〜然うていいますか」といふたもの、「夫れでも計らひが止みませぬ」といふと、「オオ精出して計らへ」と仰せられる。私は「夫れでも有難う御座りませぬ」といふと、「オオ然うぢや、極樂に行く迄は有難いといふのは皆な嘘ぢや」と言はれる。「けれども人が講座の前であ〜いふやうに喜んで居られるのが、私は羨ましくてなりませぬ」といふと、「あれは皆な嘘ぢや、有難くないのが本當ぢや」と仰しやられる。私は合點が參りませぬので「夫れでは死ぬと何うなります」と夢中で突か〜て行くと、「何うなるものか地獄へ眞さかさまだ」と仰せられてしまつた。私は驚いたにも何も、丸て聲がた〜ぬ位、成



る程地獄に行くのなら、疑つても計らつても差支は無い筈ぢや、これは妙なことを言はれると思つて、「夫れでは他獄へ行くのですか」と聞くと、「行かいて何うする」と言はれる。「私は極樂に参り度いのですが」といふと、「そんなことは駄目だ」と叱られて仕舞うた。仕方がないから「然うですが」と申上げて居ると、向ふから「能く聴け」と仰しやつて「幾ら疑つても地獄ぢやし、疑はいても地獄ぢや。計らつても計らはないても地獄の外に行き場は無いのぢや」と言つて下された。然う言はれるもの故、「それでは何うしても地獄の外に行き場は無いのですか」と念を押すと、「無い」と言つて仕舞はれた。その時は私はいいた口がもう塞がらぬ、あとで思ふと顔色も何も變つてしまひ、丸で引くりかへつたやうにあつたのであります。すると御使僧は「もう墮つて行け」と言はれて、そして「あつて言はれるには『その墮ちるより仕やうの無いもの』を、墮さんといふ本願ぢやがな」と仰しやつて下されて、そして其處に茶があつた、夫れを取つて「サア苦しかつたらう、飲め」と言はれ、「サア息をつけ、安心がなられたらう、苦しかつたらう」と、夫れから種々の御話があり、私も此の時ばかりは非常に喜ばして貰ひ、丸で身體がひとりてに飛び上る程に嬉しかつたのであります。

さて夫れからは氣を入れて奉公も仕て居りましたが、二十日程たつと又夫れが何處かへ醒めて仕舞つた。はてこんな筈は無いがと言葉丈けは覺えて居ります故、「俺は地獄より外に行き場は無い、墮ちるのぢや、その墮ちる者を墮さんといふ御本願」と、何程繰反して見ても氣が濟まぬ。「あゝ困つたこ

とになつて仕舞つた。又もとの通りになつて仕舞つた」と、頻りに心配しますれども、最早や外に聞きにゆく所が無い。それは今の御使僧にお聞かせに預つた時、御使僧の言はれるには「自分も使僧として四年間東京に出て居るけれども、まだお前のやうに本氣に聴聞して呉れる人に出會つたことが無い」と、非常に喜んで下されたもの故、「又駄目になりました」と、今更又言つていかれ無い。さればとて外に行き場もないから仕方無しに又出かけて行つたのであります。併し今度は先きのやうな張り合もなく、全く首を投げて参つたのであります。すると私の顔を見るなり「何うした」と向ふから聲かけて下された。「御使僧様、又もとの通りになりました」といふと、「ウン然うだらう。モット早く醒めるだらうと思つて、お前の來るのを待つて居たが」と仰しやられた。私は「それでは私の斯うなるのを御存知て居りましたか」と聞くと、「ウン餘りお前が喜んだ故、屹度その中に醒めるだらう、醒めた時は苦しむだらうがと可哀想に思つて、モット早く來るだらうと此間から待つて居た」と、さう仰しやられて。私は然う言つて貰うた丈けではや心が大變樂になり、安心さして貰うたのであります。猶ほ御使僧が言つて下さるには「そんなことはかから先きも度び／＼ある。まだ佛に成つたのではないぞや」と仰しやつて下され、私も「まことに然うてしまいました」と、最早や何の心配もなく、安心して喜ばして貰つて居つたのであります。

## 三

さて夫れからもちよい／＼参詣して、御聴聞は仕て居つたのであります。三四年たつ中又折々勘定のつかぬ思ひが起つて來ることがある。之は何うしたのかと、夫れからは何處といふ所さらはず、あの方はいよいよ説教と聞くと、すぐその方の膝下に参り、お聞かせに預り／＼仕て居つたのであります。併し大體は今のお聞かせて安心が出来たやうに思ひ、夫れが先人主となつて、その後は不審のたつことはあつても、夜寝られぬといふ程の心配をしたことはなかつたのであります。その中東京でも色々失敗を重ねて田舎に歸るやら、再び東京に出て來るやら、後には横濱に流れることになつたのであります。

横濱に参つてからもお参りは始終仕て居つたのであります。が、段々考へて見るに、まだ何うも本當の盤石からの安心は無い。何も事の無い時はようムリですれども、今にも出かけて行かならぬがと思ふと、何んだか流れ川に盤石を据えたやうな、何うとも返事せぬものがあるやうな心持がする。何方へ参つてお尋ねしても一應の安心はつのであります。が、何うも本當の腹底迄の安心はつかぬ。夫れからは、何うか何時死んでも差支無いやうの安心を得度いと骨折りました。併し夫れがどれ丈け聴聞しても何うにもならぬ。その後色々お方様から色々なるお聞かせを受け、とうと仕舞ひは、どもならぬことに氣づかして貰つたのであります。すると之は大きに都合がよい。成る程今迄何うかなるやうに思つて居たのが大きな間違ひであつた、成る程何れ丈け骨折りてもあかぬ奴であつた、といふのが結局になつて仕舞つたので

ある。夫れからは自分でも「如何にも」と思ひまして、又今度はさういふ風の御教化を聞くと、成る程／＼と一々合點が出來る。「今迄のことを振り反へると、何を言ふも皆な偽りの外は無い」と言はれると、「如何にも自分も然うだ」と受けられる。故に結局「人間は嘘事より外に無い、偽はりより外に無い、このやうな者が何うかなるやうに思ふて居たのが長い間の間違ひであつた、これきり死んでゆく丈けの代物であつた」と斯ういふ風に聴いて居つたのであります。

さてさうなると一旦は都合よいが、又やがて腹底迄手を入ると、何うとも返事仕無いものがある。夫れでこの邊のことは各方面のお方に度び／＼御尋ねも致しましたし、又自分でも氣になるから、人様から今出かけると思ふと何うなる」と聞かれると、「自分も夫れが何うかなると思つて一生骨折つたけれども何うもなれなんだ。何うもなれぬなりで終るのではあるまいが、併し何うかなるやうに思ふたのも大變な間違ひであつた。その邊のことは、私にももう更に分りませぬ」といふのが私の結局であつたのであります。猶ほそれから後も、私の病はいつもこれ一つ。或時或る方にお尋ねして、「臨時の底迄手を入れると、何んとも返事せぬものがムリですが」と申上ると、「それはよいものに氣がついた、夫れが即ち佛ぢや」と仰せられ、私も「異なことを仰しやる」とは思ひましたが、勿論そんなことで安心のなされるものではなし。ですからこれ迄の私の聴聞は、結局にゆくとも何とも仕やうの無い者だといふ一つに決着してしまつたのであります。寧ろ仕舞ひは、「お前は馬鹿だ、偽り者だ、似せ者だ」と他から言はれると、

却つて夫れが嬉しいやうな心持ちで、「如何にもこの爲め親様を泣かせたのだもの、このやうな者が本願の土臺であつたか」と、こゝろいふ風の聽聞であつたのであります。

それで近角先生のこととは疾うから御尊名は承はつて居り、又斯くいづも腹底押へると、心元なき氣持ちが有りましたもの故、何うか誰様に聞いて欲しいとは常に思つて居つたのでありますけれども、色々人から言はれたこともあり、つい昨年迄出歩いて居つたのであります。昨年遍照師に迄一寸その事を言ひますと、師も近角師は信仰上の權化だと言はれ、私も急に御聞かせに預り度い氣持ちになり、出かけて参つたのであります。それで私の出て参つたは、申譯けない話なれども、本當に後生が苦になつて出て参つたのでは無く、今いふごく僅かな處が臍落ちなり兼ねて、出て参つたやうな次第であつたのであります。

## 四

昨年七月の求道會の六日の日でありました。その日は前日から家内にも、「明日は近角さんにゆく」と話しますと、家内も「是非行つてお出なさい」といふ。「東京に外にも用事があるけれど、今日はそのことばかしの行く」と申し、朝出て参つたのであります。九時頃學舎に参りますと、御講話の最中でありました。うしろに居て聽聞して居りましたけれど、よく講話も耳に届かず、御話が濟んでから先生の前に出てお尋ねを致しますと、先生は「晩に談話會があるから晩にしては何か、すると皆んなも夫れが聞けて都合がよいから」との仰

せでありましたから、又晩の七時前に出て参つたのであります。それから先生にお伺ひしてよいかとお尋ね致し、夫れから伺ひ初めたのである。その時の先生の御諭しが、即ち昨年の求道第五號に横濱の一老人の尋ねとしてお載せになつて居る譯けにて、私が先生に御伺ひすると、先生は「お慈悲を頂くことが缺けて居る」と仰しやる。「へい」といふかしく受けかねて居ると、先生は重ねて「お慈悲に安んずることが缺けて居る」と仰しやる。私は先生は妙なことを仰しやると思ひました。私にする時は缺けて居る位の話じや無い、實にお慈悲喜ぶすべ知らぬ奴位な腹で居る。あゝ先生はまだ私を買ひかぶつて居られるな」と思ひましたが、併し又考へると何うしてあゝいふ風に仰しやるのかしらとの不審も起つて來る。それは私にする時は、お慈悲離れて聞く處の有らう筈は無い。何故然うかといふに、私にすれば是迄一代の間頂く頂かぬ一つに苦んで來て居るのである。それ故さういふ氣持ちが出て來たのであります。それから先生に段々聞かされた事は、雜誌にもあること故茲には申さ無い。それで私は、あきかさを蒙つた初め二晩程といふものは、先生の仰しやる處と、私の頂いて居る處と、ちつとも違つた處が無いやうな感じが仕て、甚だをかした具合で頓と合點が行かぬのであります。それでその晩も七時十分前に伺ひ初めて、十時過ぎになり、もう頭もポツツとして何が何んだか分らぬやうになつて來る。先生も「三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、大菩提心おこせども、自力かなはて流轉せり」とは、お前のことだと仰しやつてしまつた。私も「先生も、頭がポツツと

仕てしまひましたから」と申すと、「それでは之から勤行するから参つていかんか」と言はれる。「イヤ歸ります」と申すと、「イヤもう遅いから歸れまい、泊つてゆけ」と仰しやる。「イヤ歸る都合に仕て置きましたから」との事に申して、たつて止めて下さるを無理に辭して出て行つたのであります。

さて夫れからその時の心持といふものは、何とも言ふて見やうが無い。歸へつたて最早や寝る氣もせぬ。「えい、汽車にも電車にも乗れぬでもない」と、無暗に出て行つたのですが、折りよく汽車にも電車にも乗れ、家に歸り着きますと、家内は寝ないで待つて居た。「何うでした」と聞きまますから、「イヤ何うにも斯うにも大失敗」と、ろくすつ返事も致しませぬ。せぬなりに譯けを言はず、其儘床に這入るは這入つたのでしたが、迎も寝つかれる段ではない、煩悶に煩悶して一晩あかしたのであります。

その中夜があけましたからまことに張合ひ悪く起き出で、朝の勤行をつとめさして貰つた。昨夜先生の仰しやつた「三恒河沙」の和讃を手にとり、恨めしさうにらむんで居つたのであります。すると妙に一寸感じたことがありまして、「あゝ今迄この和讃を何氣なく頂いて居つたが、之が現に、わしのとてあつたか」と氣づかして貰ふと、夫れなり心が大分樂になつて來た。「あゝ成る程さうであつたか、實に長いこと申譯けがなかつた」と喜ばして貰ふと、心が大變安らかになつて來た。で自分の腹では一旦解決がついたやうに思ひました故、それからその日の用をたし、又學舎に出て参つたのであります。するとその晩は先生が私に仰しやるには、「昨夜の續きも話

しせんならぬが、遠方から見えた人が大分居られるから、その人に話してからにしよう」とて、少時外の方に御話があり、そのあとで「又言はうか」とて、御話が始つたのであります。私もこの晩は朝の事で少し元氣づいて居りましたから、「先生、あれからの心持ちは斯う」とお話し、「今朝勤行中これ〜で喜ばして貰うた」と申上げたのであります。すると先生は「それで何うか」とすぐ引つかへしてお尋ねになつたもの故、私は「ハツと行き詰まつて、あとの口があきませぬ。ウンとつまつて仕舞つたのであります。すると先生から「悪いと氣がついた丈けなら、矢張りもとの穴ぢや」と仰しやられてしまつた。サア私は又分ら無い。もう此の晩は「先生何もかも斟酌なしに申上ります」と申して、勝手放題、心にあること皆なさらけ出し、糺して貰はんならぬと骨折つたのであります。先すけれども、とうど分らず仕舞ひに終つたのであります。先生の仰しやるには「成る程言ふ如く善くなれまいが、それであなだが、よいといふことでは無い。そのあなたをば、哀れ可哀相ぢや、捨てぬとあるがお慈悲である」と、一生懸命聴かして下さるけれども、夫れはまことに有難いけれども、あとで「何うぢや」と先生から問ひ反へされると何とか返事せぬ事はならぬ。それで「先生分りました」といふと、すぐ「何う分つた」と言はれる。「有難いと分らせて貰ひました」といふと、「有難い位なことか」と言はれて、もうあとの口が續きませぬ。夫れから又段々お説き下されて、又「何うだ」と聞かれる。「申分の無い事で」と申すと「申分の無い位なことか」と言はれて仕舞うて、お受け仕度いにも何うにもお受けが出来ませぬ。

それを、つい出来ぬといふこともならず、斯くて二晩目も分らず仕舞ひであつたのであります。この二晩目には仕舞ひには、先生も「もう駄目だと突きやつてしまへ」と仰せられ、私も「もう駄目です」と申して、駄目と駄目とで分れたのであります。

## 五

さてそれからは又張り合ひが無い。翌日又出て参つたのであります。けれどももう伺はうやうやもなく、唯お辭儀した丈けて、黙つてお話を聞いて居る。でも先生は御親切に武田さんが越前にゆかれた時の狂ひの喩の話を、私に知らせる爲めに色々言うて下された。その味ひにつき私の氣づきましたことは、「成る程私は狂ひが狂ひぢや」と言ふたのであるが、さういふてるのがほんに本當の狂ひである。處が先生の御話は、その狂ひが狂ひぢや」といふてるのを見る親の思ひにする時は、その狂ひを何時迄も狂ひの儘に捨て置けぬのが、親が子故の狂ひの御苦勞であるとの御諭しであるが、如何にも然うだ」と思ひまして、それであとで「分つたか」との仰せであつたから、「えい長い間狂ひぢやなど申して、申譯けが有りませなんだ」と申して大に分つた積り居つたのであります。それで三晩目の歸りには大分我慢が折れ、「あ、申譯けなかつた」と思ひ、歸つて來た。そしてその翌日は家内も聴き度がり申す故、お前行けと申して、私は御無沙汰仕たのであります。

その翌日からは又私が参らして貰うた。今度は何んだが人

いて居つた處をすつかり碎かれて仕舞うた。さあ碎けたとなつたら、いゝんな思ひがあとから出て來る。「一體阿彌陀様も阿彌陀様だ。十方衆生なんて、何んてあんなを言つて置くのだ。他力なんて一體何だ。人を救ふなんて何言うてるのだ。」とそれが腹からむく／＼込み上げて來て仕やうが無い。「設ひ聞きやうは下手でも小供の時より今日迄一生懸命聴いた積りだ。聴きやうが不足なら不足と言つて見ろ。俺も最早や助けて貰はいてもよい」との思ひがむく／＼起つて來るのであります。助けて貰はぬとすれば俺は地獄だ。地獄行きの方が道徳も人情も義理もへつたくれもあるものか。何うせ地獄なら此の世の義理も法も言うて居られぬ。又親も親だ。親大切と今日迄は思うて來たが、地獄に行く悪人に親に孝行のある筈は無い。俺には最早や道徳もなければ御恩も無い。仁義もなければ人情も無い。イヤ御恩どころか地獄にやるやうな佛には、俺は恨みがある。一層耶穌にでもなつて呉れやうか」といふのがひとりてに口にぼく／＼出て來るのであります。「一層内へ歸つて佛壇も何も叩きこはして呉れやう」と、それが無暗に腹から込み上げて來て仕やうがない。「これは押へんならん／＼」と、自分でやつと押へつて宅へ歸つて参り、家に這入つてデツと仕て居りますと、家内は心配して「何うしたか」と言ひます。「俺は氣が違つたやうだ。言ふまいと思ふけれど、お前丈けには言ふから、一言も逆らつてはならぬ。若し逆らふと、俺は氣がふれて仕舞ふから」と申しますと、「何んてござりますます」とささますから、「イヤ俺は佛壇を釘づけに仕やうと思ふ」と言ひ出しやした。すると家内もびつくりしまして「何

様にも決まりが悪く、前にも出られぬ氣持がする。この席ならこそつまみ出されなんだが不思議と思ふ位に耻かしく、前にもよう出ずに居たのであります。その夜も先生は何に就けても私に知らせる爲めに色々言うて下さる。遂に仕舞ひには先生に餘りに申譯けがなく、自分のことは何うなりてもよいから、先生の氣に入るやうの返事仕度いとの思ひも起つたのであります。又實際お聞かせに預ると、夫れ丈けは分るのだから、そこで「分りました」と言ふと、先生は「矢張りもとの穴ぢや」と仰しやる。之にはまことに困つたのであります。骨折りに聞かねばならず、聞いて分つた處が結局もとの穴である。故に先生も「わしが之れ程言ふても、わしの言ふのを皆なお前は夫れも知つてる／＼と、お前の穴におとして仕舞ふ。」と仰せられ、然う言はれると私も何とも仕やうが無い。

それこれして中一週日の會期も果て、仕舞うたのであります。併し十五日にはま一度御講話があるとなつて居りました。すると濱に於て一日用足しに歩いて居りますと、途中で俄に腹からむく／＼と譯けもないことが口に出て來る。思ひも寄らぬことが、腹から湧き立つて來るやうに口に一杯になつて來て、口がむく／＼と動く。道通る人が私のその様をいぶかしかつて、皆んな後をふり向いて通る。自分でも之はとうど狂ひになつたなと思ひまして、デツと心を静めやうと仕ますが、今は心が狂ひの苦しきである。今狂ひになつては人にも迷惑かけると一生懸命氣を静めて居つたのであります。夫れは、非常なる煩悶でふいまして、夫れといふのは上京して聴き出して、三四日目位にて、これ迄命懸けて聴

ういふ譯けか」と尋ねます。「イヤ俺は一代これ程一生懸命に聴いたのに、今は佛に恨みこそあれ御恩は無い、故に俺は釘づけに仕て仕舞ふと思ふ」と言ひますと、家内も怖しがつて何ともよう申しませぬ。「併し俺は釘づけにする積りだけれど、お前は喜んで居るから、お前の爲めに然うはせぬから、その代はり俺は之から、佛を捨てるから、お前何うなりと勝手に仕て居れ」と言ひますと、家内は「イヤ私にさへお給仕さして下されば充分です」と、夫れから家内は丁度晝時でしたから、念佛しながら御佛飯を下けたり仕て居りました。處が私は便所に參るに、その間を通らなければ行かれ無い、困つたから佛に顔をそむけて通つたのであります。多年の習慣でそこを通る時に思はず念佛が出来ますから、早速手で口を押へて、「念佛など稱へるものか」と、この二三日は殆んど煩悶の極點迄行つたのであります。

する中、十五日最終の御講話日となりましたから、その時は私はやけ腹で朝から出かけて参つた。その日は、あとで談話會もありましたが、私は兎に角先生に長々遣る瀬無き御聞かせに預つたのであるから、一應御挨拶をせんならんと思ひまして、居のこつて一應の了解を述べ、「先生段々の遣る瀬無きお聞かせで、彌々此の者を御見捨てなき慈悲と丈けは受けまして貰ひました」と、それ丈けは分つて居つたから、さう申上しました。すると先生はイヤな顔付きを仕てブイと横の方を向いて仕舞はれた。そして「そちらの方より先き慈悲を言はれると、わしはもう口があけぬ」と言はれた。私も大方然うでられるだらうと思つて居つたので、すると先生は「お前の

は此間から長々聞くから、何とか言はんならぬと思つて、こ  
しらへて言うたのだらう」と言はれた。私も「然うです、言は  
んならぬと思つて、腹でこしらへて言ふたのです」と申し「そ  
んなら先生本當のことを申しませうか」と言ふと、先生も「夫  
れを言へ」と仰しやつた。「夫れでは」と私は躊躇しながら其處  
で今の煩悶したことを申上げたのであります。すると先生は  
案外にも何のお叱りも無く、猶ほ懇々と御親切な御聞かせに  
預り、その時も夫れで大に分つた心持ちで歸つたのでありま  
すが、矢張り結局又もとの穴である。そして此の日切りで先  
生は地方へお出かけになることになつて居つたので、心元な  
く地方よりの御歸りを待つて居つたのであります。

六

さて是れから九月の十九日だつたか二十日だつたか、先生  
の御歸京次第又々出て参り、毎日曜段々の御聞かせを受けた  
のでありますけれども、矢張り何うしても慈悲が頂かれま  
せぬ。骨折つて聽いて、聽いて分つた處が、分つたのが矢張  
りもとの穴である。長年聽いて聞き抜いた爲めに悪い癖がつ  
き、如何にしても慈悲を頂き兼ねたのであります。それで  
も毎日臆せず缺かさずに濱より出て参り、お聞かせに預つて  
居つたのであります。

處が昨年の十一月の幾日だつたか、初めて漸く心づかして  
貰つたのであります。その時は「善も要にあらず悪も恐れな  
し」の意味の御話で、先生が仰しやるには、「我々の親切は、此  
方が如何程親切にしても、相手がそれを受けぬばかりか、  
却つて反對にそれを悪く取られた時は、如何に親切に考へ  
て居ても、忽ち夫れが碎けて仕舞ふ。處が今佛の御眞實は、  
我々が今現にそれを受けぬばかりか反對して居る、其の反對

頻に感じさせて貰ふのである。と言ふのは私は從來聽聞の點  
に於ては、決して人の後につかぬ程にお聞かせに預つて來ま  
した。その私がつい此間迄この誤りに氣づくことが出來な  
かつたのである。故に如來のお慈悲は、人生問題とは全く別々  
に考へて居つたのであります。それは王法といふことは小供  
の時より聞かされて居つたのでありますけれども、それは信  
心頂いた上は、王法として守らんならぬといふ聞きやうであ  
つた。だから俗諦の上に於てどもならぬから、それにつきて  
も慈悲頂かんならぬといふて居たもの、其處が何うもか  
け離れて居た味ひがするてゐます。故に從來は、唯墮ちる  
者をお助け、と口では言ふて居つたもの、その墮ちるが  
唯臨終といふことにはばかり傾いて居て、而も今現に墮ちつ、  
ある味ひは、口には言つて居たもの、本當には分つて居ら  
なんだのであります。故に「信じた」、「頼む」、「自督」、「領解」とい  
ふやうな、何か手丈夫な「ツツ」が欲しくてならなかつ  
たのであります。爾るに「マア今日私の喜ばしく頂くのは、」私  
は一生とらうど腹の始末がつかぬて困り切つて仕まつた、この  
やうな私をお見捨てなきお慈悲である」ことを知らして貰ひ、  
今日ではらくらくと、申さうやうもない次第でゐます。

猶ほこれ迄は俗に言ふと、御化導通りの腹になり度い爲め  
苦しんだのであります。今日はとうとう夫れがなれなんだに  
つけ、如何なるお慈悲の不思議かと、唯々向ふ様の思召を喜  
ばして貰ふばかりでゐます。  
猶ほ思ひまするに、私はこれ迄の持ち物がこはれるのに非  
常に骨が折れました。若し先生の御教化が、なま優しい御諭  
してあつたならば、何うしてこの我慢な私の持ち物がこ  
はれるものか。自分の自力のひどいにつけ、全く先生のお諭  
しの手強かつたお力である事を始終家内とも申し、喜ばして  
貰うて居る事てゐます。

し受けぬのを佛は初めから御承知の上で、然ういふ者が可哀  
相故捨てられぬとの慈悲である」とのお諭、私は之を承は  
つた時最早や言葉がたちませぬ。思はず感涙に咽んで、此の  
時初めて思ひがけなきお慈悲である事に心づかして貰ふたの  
であります。すると先生も講話中に私の様子に目をつけて下  
されたものか、あとで「何うぢや分つたか」と仰しやつて下さ  
れ、私もこの時初めて先生に眞の懺悔をさして貰うた事であ  
りました。あとで考へますに、このことはこれ迄も先生は度び  
／＼仰しやつて下さつたのであるけれども、私は夫れを聞き  
ながら分らなんだ。爾るにその時は、何んだか今迄嘗つて聞  
いた事のない、初つ事の意外なことを聞かされたやうで、唯  
々私はびつくり顛倒してしまひ、如何なる御不思議かと、私  
は申譯がふりませぬといふより外に無かつたのであります。  
猶ほその後段々のお知らせに預り、喜ばして貰つて居  
るのであります。私の自分として氣づかして貰うたことは  
從來は唯後生々々と、さういふ方ばかりに心懸けて居た。何  
かと言ひますれば、娑婆は業報に繋かれて居るのだから、何  
うにも斯うにも仕やうが無い。何うも斯うも業報次第にし  
かならぬのであると、その儘でちやんと片づけて置いて、サア  
その業報の爲め地獄より外に行き場のない者を救ふて下さる  
御本願々々と、それにばかり心を使つて居つたのである。即  
ち娑婆の苦は約束事故仕方が無いとかけ離して置いて、だか  
らこれから先きを安心仕度い／＼と申して居つたのである。  
自然御助け一つを手丈夫にせぬならぬから、そのみに首を  
突込み、結果ばかりしを問題に仕て居つた。だから如何程骨折  
り／＼しても、これでは到底安心の出來る譯けはなかつた、  
といふことをし／＼思はして頂くのであります。そしてこ  
れは從來説聽共に間違つて居つたといふことを、私は今では

### 今迄は自分といふものを 柵に上げて居た

前田はる

この度求道會から、數ならぬ、私に告白をかく様にとの御  
通知ありしにつき、誠に／＼おはづかしう御座いますがか、  
せて頂くことにいたしました。

私は小供の時分より、母につれられて、しじう御寺へ参詣い  
たしました。その内母が大病になりました。いよ／＼となり  
ました時に、私に母の遺言に申すに、お前のからだの下は  
たとへ坐つてゐても、たつてゐても、ねてゐても、あしの下  
は、地獄であると云ふことを、忘れてはならぬと、たゞこれ  
が母の遺言でありました。

私はその時は、さ程に思ひませんでした。が、三年ばかりた  
ちますと、其時母の言はれたことが、心にかゝりまして、そ  
れから、何でも、かんでも、御信心一つを頂いて、安心がし  
たいと、思ひまして、非常に苦しみましたけれども、どうし  
ても、安心が出來ません、この上は京都へ参り御本山の總會  
所で、御聞かせを蒙るより外に道はないと思ひましたから、  
京都に私の兄がおりますから、早速兄の處に行き、そこから、  
毎日々々總會所にかよひまして、いろ／＼と御さかせ蒙りま  
したから御信心が、頂かれた様に思ひました。それから早速  
にまた横濱にかへりました。或る日高田別院に参詣いたしま  
した。御使僧様の説教がありました。この方の説教はいつも

人の説教とは、少しかはりて居りましたから、此方に随分一生懸命に九ヶ月間、御さかせに気づかれました。其時折角總會所で頂いた御信心がさつぱり、こわれませんでした、幾度もこわれては又で、實に〜煩悶致しました。

然るに明治卅二三年頃に或る御使僧様に誠〜御深切なる御化導を蒙り、實に〜この様な嬉しき事はなきこと、思ひ、それから又々永年の間一生懸命聴聞いたしました、けれども、私はこんな聞き様して居りました。

たのんだと言ふか、信じたと言ふか、こんな心がこんな心か、どうなつたとして、地獄より行き場のない奴、その者のために出来た、御本願と御さかせ蒙り只々御念佛申すばかりと思ひました。それが誠に分つた様で、分らん様で又々苦しみました、聞けば、さくほど、分らん、分らんでよいのではない、どうか分る様に思ふたが間違でありました。何にも分らん實に一生何をさいてをりましたや、私程の馬鹿はありません、實に罪惡の塊であると云ふまでが、親様の御恵みであると云ふのが、私しの自督の様に御さかせ蒙り居りました。今から思へば、自分の聞いた事に用事のなくなつたのが、自督の様に思つて居りました。

それが昨年の七月頃より、私の夫が近角先生様に色々御さかせ蒙りました、それから、非常に煩悶致して居りました。その時私の思ひましたには、夫が煩悶いたしますのが實に不思議に思はれ、これまで永年骨折つてさかして頂いたのに、今更こわれたと云ふのは、實に〜あきれました。その時私の思ひますには、これがこわれたとすると、もう〜、どなたが、ほんとうであるか、さつぱり、分らん佛様の仰をさくより外に道なしと思ひ、その時親鸞におきては只念佛して彌陀に助けられぬらすべしとよき人の仰を蒙りて、信する外に別の仔細なきなりと云ふことを、ふと心に浮び、實に之である、誠に念佛はたふとき事である、たとへどの御方が、まぢがひであると思はれるとも、そんな事はどうでもよい、たゞ御念佛ばかりは尊きことであると喜び居りましたけれど、夫が非常に煩悶致して居りますから、何んだか、心にかゝる様であります、しかし、先生様の處までまわつて、聞かせて頂く氣にもなりませんでしたが、其内先生様も御不在になり、それから九月廿日頃、御歸宅になり、廿一日には又々夫が、先生様に御さかせ蒙り、それから度々夫は先生様に御さかせ蒙りて居りました。

十一月の中頃の様に思ひますが、夫が私に申すのには、今日は先生様より、告白を致せとの仰せで誠に〜、困りたとの事、それをさ〜ましてから、何んだか、私しがあたりまへなればどもに喜ばねばならぬのに、その告白の話を、さ〜ますと、私の氣が變になりました。今まで御念佛の有難かつたのも、さつぱりあり難くなくなりました、まだ其上に腹が立つ様で、何とも云ふて見様のなき心になり非常に煩悶いたし、夫が喜びますと、實に憎らしい様に思はれます。それから、十一月廿一日に、先生様に、この事を御話いたしましたら、先生様も誠に〜御深切にいろ〜御話下されたも、分つた様で分らん。それから度々伺ひまして、又色々御さかせ蒙りました。先生様の仰せられますには、何か人生問題に付

時報

求道講話概況

(聽講甲記)

一月十日。快晴。講席の側なる花瓶には梅水仙など挿まれ、清澄の氣室に満てり。今日を初めとして、今年一年又々日曜毎にこのなつかしき法席に列り、尊き御教へを蒙り得る吾等の幸い如何計りぞや。さて今日は「人生の第一義」と題せらる。現今社會も個人もすべて動亂の極に在りて、今迄は色々と思ひ振舞や、態度などにて兎も角も一時を御座し來りしも、最早すべてかゝる計ひが間に合はざる様になり、如何にしても夜が明けぬと云ふ状態となり居れり、されば此上世間的にとやかくの手段方法はあるべきに非ず。然るに今意外にも、かかれて人生の暗黒を知召し、其暗黒なる所を憐むとあるが佛の慈悲なり。頂くべきはたゞ此一點の外になし。人生の第一義とはこの絶對の恵を得ることにして、社會の各方面は必ずこの慈悲一つによりて夫々眞面目なる立場を得るに至るべきなりとて、これより重ねて暗黒を救玉ふお慈悲の味を懇に説き示し給へり。

一月十七日。晴、筆者病氣の爲不參。  
一月二十四日。薄雪地に布く晴。願力自然」と題せらる。先づ世間にて自然と云ふに種々の意義あり。されど眞宗にて云ふ自然はすべて此等の意義に異なりて如來の誓の然らむるが故に自然と云ふなり。即ち願力自然なり。我々の信といふもこの願力より自然に起さしめ給ふなり。今日此題を出せし動機は、近頃法を求むる人の多くが、有難く頂きたいといふ考か切なることを發見せし爲なり。こちらから有難く頂きたい心は、こぶに非ず、有難い心も嬉しい心も起らぬ一分一厘誠なきものを他處見捨て給はぬお誠ときて、かゝるものなよくも〜とお慈悲に腹ふくらせて頂くが自然の信なり。私の心は濁水なり、到底澄む期なき濁水なれどもそこへどれだけでも限なく清水が来て下さる故に遂に濁水でなくなるなり。他處あきて下さらぬお慈悲が遂にわが身底に徹底して下さるのが信仰なり云々。

一月三十一日。曇。參詣の途次小雪ちつき、寒さ甚し。聽者少しく退參し、講席を逸したり。後半主として無碍の味を説かる、無碍の味を頂かれば佛智不思議を信すること能はず。無碍とは障り無きこと、抑も我々は常に人生の障りの爲に障へらる。善人が悪人に對して悪く思ふもそれ障へらるるなり。近頃

て話はありませんかと御尋ねが有りました。私はその時、別に人生の事につきては、何もありませんと御答へいたしました。先生様は、なければよいかと仰せられました。それからその事が、どうも氣にかゝりて何とも、御尋ねのしつて見様もなく、また外の事についても、誠に御深切に、御聞かせ蒙りても、どうも分らん、分つたやうに分らん、先生は分らうとするから駄目じやと、御聞かせ下され、實に〜情ない様な、はり合ひのない様な心の苦しき事はとても筆にもつくされませぬ。それから、追々御さかせ蒙ります内、ふと人生問題のこゝとにつきさづかせて頂きまして、誠に〜これまでの聞やうが結果ばかりを、よろこび、人生の事は、何事も、因縁であると云ふ様にさいて居りましたから、人さんにはあきらめられいでも、あきらめられた様に見せかけて居りました。實に私の腹ぞこの恐ろしいこと。何ともかんと、あきらめるところか、不足より知らんやつである、此私しの腹ぞこを知る人あらば、たとへ夫婦でも、兄弟でも、親でも、愛想をつかさされる腹ぞこである、實に今までは、自分と云ふ事に氣がつきませんでした、實に私は、今現に暗黒であります。眞にしてみ様ない、親様を泣かせましたは、此私一人て御座いますと茲を氣づかせて頂きまして、實に永年の間私のへだて根性で、永い間親様を苦しめ通して、來ましたのである、やつぱり今も苦しめ通してありますのに、此奴をあく迄、御見ぬさ下され、悪ければ悪い丈、その上その上と、御見捨なさ、廣大なる御慈悲とは、何たる嬉しき事でありませぬことやらと、かゝる廣大の御慈悲を思ふては、又我身の、淺ましき事を思ひ、實に〜ざんぎ致しては、御念佛となへさして頂いて、居ります。自分のはづかしさも、かへり見ず、拙き筆も、くどくどしく書かして頂きました。よろしく御はんじ下さりまし、南無阿彌陀佛〜。

青年の人々が人生は駄目なり、故に我に對する同情を得たしと云ふ。されど冷やかなる人生に暖く同情を持ち來さんとす。...

第二求道會土曜講話 (聽講乙記)

十一月十四日。『函蓋相應』と題する。函はハコ蓋はフタである。即ち函と蓋がヒツシと合ふ事なり。如來の思召を私共が餘地なくカッチリと頂く事を申したのである。...

求道日曜學校記事

開始以來既に十四回を數へるやうになりました。まだ寒季を去らぬ爲め、毎回出席の児童數は三十名を出ませぬが、在籍児童數は相當の數にのぼるやうになりました。...

求道會館建築寄附

金第十一回報告

(二月中旬迄)

- 一金五十圓也 福岡 延吉殿
一金四十圓也 同 赤松やそ子殿
一金三十圓也 寺島 恕殿
一金二十圓也 長島清太郎殿
一金十圓也 原田勝次郎殿
一金拾圓六拾五錢也(第二回) 無名氏殿
群馬 草津佛教說教場殿
内譯 藤井芳衛殿 兒玉信義殿 神戶浪吉殿 市橋慎悟殿 石谷健太郎殿 花谷金藏殿 藤内金藏殿 無名氏殿 堀内松太郎殿

- 金五十錢也 山崎代吉殿
金五十錢也 石村精太郎殿
金三十錢也 北村谷みね殿
金三十錢也 南塚千代殿
金二十五錢也 大岩ふさ殿
金二十錢也 加藤ふさ殿
金二十錢也 小泉みさ殿
金二十錢也 安山中五郎殿
金拾圓也 福岡 立石仙六殿
金拾圓也 横濱 前田清次郎殿
金拾圓也 滋賀 竹鼻元枝殿
金拾圓也 牛込 西村清殿
金拾圓也 澁谷 板橋盛俊殿
金拾圓也(第二回) 府下 宇佐美英太郎殿
金拾圓也(第三回) 府下 學舎報恩講志納
金七圓也 芝 樺島章子殿
金五圓也 府下 千野要之助殿
金五圓也 麻布 儀我保太郎殿
金參圓也 金澤 坂井助三郎殿
金參圓也(第四回) 本郷 無名氏殿
金參圓也 淺草 今井彌五郎殿
金參圓也(第五回) 大久保 岡部民子殿

一金參圓也	芝	河井昇三郎殿							
一金參圓也	新	菅野ひさ子殿							
一金貳圓五拾錢也	三	無名氏殿							
一金貳圓四拾六錢也	若	松	求道會賽錢納						
一金貳圓也	山	林	和	輔殿					
一金貳圓也	同	久	田	七	郎殿				
一金貳圓也	同	松	本	醫	一	殿			
一金貳圓也	出	雲	山	崎	海	印	殿		
一金貳圓也	福	岡	浮	川	彌	太	郎	殿	
一金貳圓也	小	石	川	家	村	柳	殿		
一金貳圓也	日	本	橋	金	丸	こ	の	子	殿
一金壹圓五拾錢也	麻	布	石	田	は	る	の	殿	
一金壹圓也	豐	橋	大	河	戸	謙	龍	殿	
一金壹圓也(第三回)	臺	灣	高	掠	ち	と	子	殿	
一金壹圓也(第二回)	山	形	岡	田	彌	作	殿		
一金壹圓也	同	大	山	政	治	殿			
一金壹圓也	巢	鴨	荒	井	平	吉	殿		
一金壹圓也(第二回)	島	根	市	野	原	彌	太	郎	殿
一金五十錢也	東	京	山	谷	殿				
一金五十錢也	同	後	藤	み	つ	子	殿		
一金三十錢也	同	笠	原	殿					

總計金貳百八拾八圓六拾壹錢也  
 累計金壹萬四千壹百參拾五圓八拾七錢也  
 右之通りに候也

大正四年二月二十日  
 世話人總代 長尾收一  
 會計監督 西澤善七  
 右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀  
 一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必ず御記入願上候  
 二、寄附金領取の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候  
 三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數同寄附等何れにても宜敷候

日的事業●入會手續

**▲國家醫學會々員募集▼**  
 ●本會は國家醫學及公衆醫事に關する左の學術を研究し其の應用普及を謀る  
 衛生學 衛生警察學 學校衛生學 工業衛生學 監獄衛生學 傳染病學  
 法醫學 精神病理學 刑事人類學 毒物學 保險醫學 流行病學  
 裁判化學 醫事法理學 醫學  
 ●本會は隔月學會を開き隨時講習科を設け又實際問題の攻究をなすことあり  
 ●本會は毎月一回國家醫學會雜誌を刊行して會員に頒布す  
 ●會員は國家及公衆醫事に關係ある公人私人とす  
 ●入會希望者は氏名、現住所、職業を明記し半ヶ年分又は一ヶ年分會費を添へ事務所へ申込むべし  
 ●東京會員は毎月集金人を出す故に會費添付に及ばず  
 ●地方會員は振替貯金振込用紙に裏書し申込まれるを便宜とす  
 ●本會會員の會費は一ヶ月金貳拾錢、即ち一ヶ年金貳圓四拾錢(前納)とす  
 ●地方會員は前半年分(壹月—六月)及後半年分(七月—十二月)宛分納することを得  
 東京帝國大學醫科大學法醫學教室内  
 國家醫學會事務所  
 電話下谷四四三番  
 振替東京三五〇番

▲現下の醫界に於ける緊急問題▼

國家醫學會雜誌第九月號登載 (特價金貳拾錢 郵税不用)  
 醫師の藥劑權に就て 醫學博士 片山 國嘉

同 第十月號登載 (同) 上  
 片山博士の醫師の藥劑權に就てを讀む 藥學博士 慶松勝左工門

同 第十一月號登載 (同) 上  
 代用藥の價値に就き 藥學博士 朝比奈泰彦

發行所 國家醫學會  
 東京本區本富士町一丁目番地  
 振替口座三五〇〇番  
 電話下谷四四三番

金子大榮先生著

最新刊

# 真宗の教義及其歴史

菊版五百餘頁  
金一圓五十錢  
郵税十二錢

本書は親鸞聖人の宗教を最新、最完全の様式の下に豊麗に説示してゐる。即ち教義、歴史の二方面より著者獨特の爛眼博識に依りて廣く三經七祖に互りて聖人の全宗教を現代に活躍せしめて居る。

- 柏原祐義著 淨土三部經講義 (第五版出來) 郵金十二圓 郵税十二錢
- 多田鼎著 正信偈講話 (第九版出來) 郵金一圓五十錢 郵税十二錢
- 中島覺亮著 異安心史 (第三版出來) 郵金七圓八十錢 郵税八錢

近角常觀編著書目

## 親鸞聖人の信仰

二版 定價七十錢 郵税八錢

## 執持鈔

新版 定價三錢 郵税六錢 施本用小冊子

●施本用小冊子は部數に應じ充分割引します

## 去年分 求道合本

定價壹圓 郵税八錢

當所は何書にても御都合により郵便集金法にて御注文に應じ可申候

申込所 東京市本郷區森川町一丁目 振替東京一六六九六番 求道發行所

### 規定

本誌は毎月一回十日發行とす  
 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず  
 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事  
 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事  
 凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし  
 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の住所を通知する事  
 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事  
 本誌定價左の如し

一部 一ヶ月 一六ヶ月 一年 郵税一冊  
 金拾錢 金拾錢 金六拾錢 金壹圓拾錢 に付五厘  
 ●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

大正四年二月十九日印刷  
大正四年二月廿七日發行

發行兼編輯人 近角常觀  
 印刷人 白土幸力  
 東京市本郷區森川町一番地  
 發行所 求道發行所  
 (振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所 東京市神田區 東京 德永趣西文庫  
 同 京橋區 北 隆館  
 大阪市南區



前號要目

求道

◎乙卯歲旦所感

「聖德太子と親鸞聖人を憶ふ」

講義

◎「教行信證」信卷(菩提心釋より)

近角 常觀

第七席 願成就釋

- 一、聞くといふは
- 二、六句の靈告と二十句の偈
- 三、聖德太子の大乗佛法
- 四、大乘は唯是誓願一
- 佛乘
- 五、聖德太子の御手引き
- 六、加賀嘉光寺
- 藏二十句文の眞筆
- 七、聖覺法印と聖人
- 八、唯

信鈔選擇本願の御教化

九、魚のとれ所の詮索て

ない

一〇、四十八願

一一、第十八願

一二、

一心奉念彌陀號の文

一三、親の手織の着物

一四、五劫思惟

一五、不可思議兆載永劫の御苦勞

告白

◎意外なる信後の變化

橘地 龜次郎

雜錄

◎内愚外賢

近角 常觀

時報

◎求道講話概況

◎昨年中求道學會信仰談話會及慶信會

出席人名